

教職大学院 Newsletter

No. 68

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.12.24

西の端からこんにちは!

長崎大学教育学部長／大学院教育学研究科長 藤木 卓

去る11月8日、9日、「教育実践研究フォーラム in長崎大学」を開催しましたところ、福井大学をはじめとしまして180名もの参会者においでいただくことができました。ご参加下さいました皆様に、この場をお借りしましてお礼申し上げます。どうも、ありがとうございました。

研究発表抄録集の冒頭にも書かせていただきましたが、今回のフォーラムは、昨年度開催しましたシンポジウム（テーマ：教員の実践力と資質の向上）の続編としての開催と、本学教職大学院での「実践と省察のコミュニティ」の今年度分としての開催を兼ねさせていただきました。一日目午前はポスター発表による研究成果報告として、教職大学院生による発表17件、学部教員による発表6件、附属学校園による発表3件、公立中学校教員による発表1件の、計27件の発表が行われました。午後は、「教育実践研究における連携の在り方を探る」をテーマに基調講演とシンポジウムが行われました。基調講演は、文部科学省の教員養成企画室森次郎室長補佐に、教員養成の現状と課題及び改革と充実や、国立大学の機能強化、大学院段階の教員養成等に関する最新の動向について、ご講演いただきました。またシンポジウムでは、長崎大学の藤本登教授に「大学教員と附属学校園及び地域の学校等との連携研究の現状と課題－小学校・中学校の教育に関連して－」の題目で、高知大学の寺田信一教授に「大学教員と附属学校園及び地域の学校等との連携研究の現状と課題－特別支援教育に関連して－」の題目で、長崎大学の附属中学校森浩司校長に「附属学校園間の連携研究の現状と課題」の題目で、福井大学松木健一教授に「理論と実践の架け橋、言うは易し、パラダイム転換があれば、行方も易し－附属学校と教職大学院との連携研究の現状と課題－」の題目で、そして長崎県教育委員会の原田尚之参事に「教育委員会が連携研究に期待するもの」の題目でそれぞれご提言をいただき、その後、フロアとの熱い意見交換が行われました。二日目は福井大学のご支援とご協力をいただきながら、大学教員や学校教員、教職大学院生らが12班に分かれて、ラウンドテーブルを行いました。本

学部・研究科における初めての試みでしたが、各テーブルともに盛り上がりを見せ、充実したラウンドテーブルになりました。

フォーラムを終えてみて、見えてきたことがありました。それは、教育実践研究の継続性と成果の共有・還元の方法です。大学教員や附属学校園教員、教職大学院生を問わず、追究した実践研究課題をそれぞれの職場や立場でどのように継続するかが1つ目のポイントになります。課題の追究に力を注げば注ぐほど、更なる課題が見えて来て、次の実践研究に繋がっていくのだと思います。教育実践に関する研究であれば、現場に還元できることが教員としての力量形成にも繋がりますので、このような研究の継続性を学部・研究科としてどのように支援するかが求められるはずで、それから、実践研究の成果を自ら実践して直接的に還元することに加えて、学校や地域、あるいは社会全体へどのように還元していくか、そしてその成果を他の教員とどのように共有していくかが2つ目のポイントになります。学会等での研究発表やフォーラムのような研究発表の場は、成果の共有・還元のひとつの機会になりますが、それに加えて校内研修や教育センター等での教員研修、教育委員会や校長等の管理的な立場の方々への報告、さらには保護者や地域の方々への報告など、学部・研究科の内部にとどまらず、広く社会全体で共有し還元できるようなシステムづくりが求められます。これらのポイントについて取り組みを進めていくには、学部・研究科が教育の現場及び教育委員会等と強く結びつき、密接な連携のもとに歩を進める必要があります。今回のフォーラムにおけるシンポジウム「教育実践研究における連携の在り方を探る」は、その意味で、正に的を得たテーマだったのかもしれない。

以上、長崎大学における教育実践研究フォーラムの紹介と課題をまとめさせていただきました。

最後になりましたが、巻頭言執筆の機会を頂戴しました福井大学教職大学院へ感謝の意を表します。どうも、ありがとうございました。

研究集会・公開研究会の報告

◆ 坂井市立丸岡南中学校

自主研究発表会 研究主題「学び合う学校文化の創造」

福井大学教職大学院 特命准教授 前園 泰徳

坂井市立丸岡南中学校では、平成18年の開校以来、3年を1サイクルとした自主研究が行われており、今年がその3年間のとりまとめを行う年となった。福井県初の教科センター方式の学校であり、平成20年度からは福井大学教職大学院の拠点校として教師の大学院在籍や、学部卒の大学院生のインターンシップの受け入れを行ってきた。ここでは、一般的な学校では想像ができないような教師の学びや、様々な人とつながり合いを持ちながら、教師全員が日々研究を続けている。坂井市において全く他にない特色を持つ学校であることから、教師の異動は研究体制や内容に大きな影響を及ぼしている。しかし、丸岡南中学校では、それをまさに教師の高密度かつ自主的な協働で乗り越え、次のステップに進んでいるという印象を強く受ける。もちろん負担となる部分もあるかもしれないが、教師の表情や行動に、それに押しつぶされているような印象はない。1人で悩まずに教師間での問題の共有ができていくことがうかがえる。そして、この良好な教師どうしの関係が、現在の丸岡南中学校の生徒の、落ち着いた雰囲気や学び合いの姿勢に強く現れているように思う。今回は、特に教師の学び合いに注目して自主研究の流れを追ってみたい。

丸岡南中学校では、平成23年度までの研究を振り返り、以下の3点の研究の方向性が示された。

1. 授業づくりに重点を置いた研究の継続
2. 教科センター方式を活用した授業づくりと学習環境づくりの推進
3. 教科の壁を越えた全教職員の協働

これらから設定されたのが、平成24年度からの研究主題「学び合う学校文化の創造」である。この主題は、まず教師自身に対して向けられたものである。というのも、平成24年度末には開校当時から在籍していた教員が全て異動してしまったことから、教師の学び合いがなければ、学校文化の継承やコンセプトの共有ができなくなってしまったからである。

授業研究においても、教科の壁を越えて毎年異なる組み合わせでグループが生まれ、お互いの授業の公開や振り返りを行うことで、学び合いの機会をより多様性のあるものにしていく。組み合わせが固定されておらず、毎年変わることによって、教師は教科外の様々な視点に触れる。そこにさらにインターン生や教職大学院のスタッフが加わることで、視点はさらに多様になっている。この点における学び合いは、現在までのところ、順調に進んでいるという印象を受ける。36ページの「研究の成果と課題」という項目に示されているように、「次のステップにつながる準備ができた

ことがこの3ヶ年の成果である」と教師自らが言えることは、素晴らしいことであると思う。このことをふまえて、今後、願わくは、機械的な教科のグループ分けだけでなく、学習内容に応じたグループ分け（例えば、家庭科のある単元を、社会の時間でさらに広げ、振り返りや発信を国語で行うというような学びの深化に応じたもの）まで流動的に出来るようになるれば、学び合いの効果が子どもたちにも直結しやすいように思う。また、各教科のメディアセンターの活用も、個々の教師が独自に展開するだけでなく、校舎の構造に応じた学びのスパイラルを追求して欲しい。こういった要望が出てくるのも、まさに次のステップに進めることを期待できる状態に教師の学び合いの体制が到達しているからこそであろう。

さて、丸岡南中学校の自主研究においては、ただ猪突猛進に主題に取り組むだけでなく、常に自ら設定した研究主題の問い直しも行われている。例えば、「学び合う学校文化」とは何か、を教師の頻繁なグループセッションで問い直すことにより、それは「生徒どうしが認め合う文化・教師どうしが認め合う文化・教師と生徒が認め合う文化」であるとより具体的に設定し直している。この主題の明示化も、教師が何を指すのかを日々確認しやすくするうえで、大きな効果を生んでいるように感じている。

本書では、教職大学院との関わりについても示されている。26ページの言葉を引用する。「授業づくりには、教職大学院の先生にも大きく関わっていただきたい。公開授業、事後協議に足繁く現場に通っていただき、生徒の実態や本校の実状を理解していただいた上で、専門的な、また客観的な立場で協議に参加していただいた。教科部会の支えとなったのはもちろん、グループ学習の形態や意義、生徒の見とりなど我々が目指す研究の核となるアドバイスもいただけ、大変心強く研究を推進することができた」。この文は、学校拠点方式を採用する我々教職大学院のスタッフにとって、大変ありがたいものであり、我々との学び合いもうまく活用していただいていることを実感できるものである。実際、私見ではあるが、拠点校としてのスクールリーダーコースの院生の確保、インターン生の受け入れ、そして、授業研究を越えた交流などにおいて、現在の状態は理想的な状況に近づいているように感じている。丸岡南中学校の教師間だけでなく、教職大学院スタッフや院生どうしの学び合いからも、今後さらなる成長が双方に生まれることを期待したい。ここでの成果とは、教師の自己満足で終わるものではなく、生徒の姿や姿勢に現れるものであることを、本書では明示している。この視点が揺るがないこそ、教師の協働がより充実化していくのだろう。

研究成果の発信には、多大な労力を必要とする。しかし、発信のためには、長期的な自らの歩みを振り返り、捉え直すという大変重要な過程を経る。丸岡南中

学校への赴任で教師が得られるものは、その後の教師人生をより良い方向に常に変えていけるような力となるのではないだろうか。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校

田中 紗衣里

11月14日、丸岡南中学校の自主研究発表会に参加しました。丸岡南中学校は、「教科センター方式」を採用した学校で、各教科の教室に生徒が移動して授業を受けるという形でした。各教科の教室には、教科の資料や生徒が授業で作ったものや感想が展示されているメディアセンターが併設されており、生徒の興味・関心を高められる環境が整えられていました。私の専門は家庭科ですが、他教科のメディアセンターも非常に興味深い展示が多く、学ぶ意欲も高まる工夫を見てとることができました。

授業は家庭科の授業を参観しました。農林水産省が食糧自給率の向上を目指して出した「FOOD ACTION NIPPON」という運動を取り上げ、自分たちができる行動を考えながら、食生活をよりよいものにしていこうとするという授業でした。この授業を通して生徒たちは、食にまつわる問題を考えるきっかけができ、消費行動や自分の食生活についても振り返ることができていたように思います。グループ活動が取り入れられていたのですが、「わからない。」という子にはわかる子が教えてあげるといったような、協力的な様子が見られました。互いを認め合い、学び合っている姿から、とても温かい雰囲気が感じられました。こういった場面が見られたのは、「学び合う学校文化の創造」という研究主題のもと、先生方が日々指導され、文化

として根付いているからでもあるのだと思いました。

分科会では、1グループ6人ほどで授業の振り返りをしました。生徒の様子を中心に複数の目で授業を見ることで、自分では見えなかった生徒の学びがわかり、よりよい授業にするためにどうしたらいいのかを深く考えることができたと思います。また、小学校で家庭科の授業をされている先生と同じグループになったのですが、話し合いの中で、「中学校ではここまでやりたいから、小学校でここまで教えてほしいといってもらえると、教える内容が重複することなく、子どもたちも学習がうまく繋がると思う。」ということをお話していました。学校内で連携を図ることはもちろん大事ですが、小中の連携、異校種間での意見交換も重要だと感じました。

インターン先の附属中学校以外の研究集会には初めて参加したのですが、他校の研究集会に参加して、研究や学校の様子を見ることで、附属中学校の現状を改めて考えることができました。学校それぞれに良さがあり、それらは学校の環境、先生方の指導、生徒の様子など、いろいろな要素が混じり合って創られていくものなのだと感じました。今回研究集会に参加したことで得た気づきをもとに、より深く学校や生徒のことを考えていきたいと思っています。

◆ 福井市中藤小学校

中藤小学校 公開研究会に参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井県特別支援教育センター

源甲斐 恵美

10月28日（金）、中藤小学校の公開研究会に参加させていただきました。

研究主題となっている「一人一人が輝き、共に学び合う」「考えを高め合う授業」「確かな学力を身につける授業」「豊かな心を育てる授業」…どのキーセンテンスも興味深く、私が『教育相談』という業務の中で、通常学級の授業を参観し、子どもの『みとり』をする際に意識しているワードがいくつも入っていると感じました。また、『学び合い』という言葉はよく耳にはしますが、実際に「子ども同士が学び合う授業とは？」と聞かれても＝ペア学習・グループ学習という捉え方をしてしまいがちで、明確な答えが私の中にはなかったことに気づき、大変勉強になりました。

今回参観させていただいた授業は、5年生の総合的な学習の時間『エコプロジェクトin中藤』です。この

単元では身近な校内のエコに焦点を当て、校内のエコをよりよくするために、地球環境問題や地域のエコ活動の取組を調べ、体験活動や調べ学習で分かったことや考えたことを4年生に発信するという内容です。ゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、地域に出掛けて調べ学習をしたり、学級を解いた学習をしたりと学びの形態も多様であり、この学習を通して問題の解決に主体的・協働的に取り組む態度を育てることを目標にしています。

この日は、学級内のグループで一人一人が考えたエコプログラムを発表し合い、グループとして1つの発信にまとめる活動と、別の学級のペアグループにお互いのプログラムを提案し合う活動でした。私が参観したグループでは、リーダー的な存在の男子児童がグループを引っ張っており、一人の思いだけで話し合い

が進むのではなく、みんなの意見を上手にまとめていました。またどの子どもこれまでの活動の中でまとめた自分の意見をしっかり持っているため、全員が参加できていたことがとても印象的でした。学級を解いたグループでの活動では、学級のグループで見せていた顔とまた違った子どもたちの顔が見られて面白かったです。

研究会では、5つのグループに分かれて、話し合いがもたれました。そこでは、付箋を使っての話し合いの仕方を子ども達にもっと指導した方がこの形態での学びがより効果的になること、子ども達が自分の言葉で語る姿が見られたこと、一人ひとりがプログラムを考えたことで当事者意識が強くどの子どもも参加できていたことが語られていました。

また、この単元においての「最終児童の姿」については、子ども達が学びを深めたり継続したりする方法として、地域社会への発信という意見が挙げられました。地域を巻き込みながらの活動は、ますます子ども達の探究活動に広がりが見られることが期待できると

感じました。

単元を進めるにあたり、学年集団で教師同士が協働してきた話も聞くことができ、私自身多くの学びがあった研究会でした。

公開研究会に参加して、「学び合い」とは、子ども同士のやり取り、すなわち「個々の気付き・わかり」を交流し合って、「より深いわかり・問い直し・思考」へと発展していく過程だと気付かされました。授業の中で、子どもが思考を深める場面や相手に伝えることでより理解を促す場面、一人では解決できない課題を乗り越えていく場面、これらの側面を他者の考えを参考にできるような機会を設けることが「学び合い」の本質なのではないでしょうか？

さらに中藤小学校の実践から「子ども同士の学び合い」にとどまらず「子どもと教師の学び合い」「教師同士の学び合い」の3つがうまく重なっていくことの大切さを改めて実感することができました。

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校 北川 優佳

2014年11月28日（金）、中藤小学校の公開研究会に参加してきました。研究主題は『一人一人が輝き 共に学び合う一さまざまな仲間と互いに考えを高めながらー』です。私自身の小学校卒業以来の小学校訪問だったため、どんな児童に会えるのか・授業者のコーディネートによってどんな学びが展開されるのか、わくわくしながら中藤小学校を訪れました。では、今回参観した学級を解いた高学年（5年1組・3組）による総合での学びについて記していきたいとします。

参観させていただいた授業の単元名は、「エコプロジェクトin中藤」でした。本時は『エコな学校づくりに4年生にも参加してもらうためには、何をどんな順番で発信すれば良いか話し合おう』という課題の下、学習する時間でした。前時までには、児童自身が学校のエコについて考え、探求し、またゲストティーチャーの専門家から話を聞いたり、校外学習をしたりしたことをまとめてきているため、本時の始めはグループ内で発表の内容や順序を話し合います。そして、学級を解いた“ペアグループ”の中でリーダーが模擬発表を行った後、みんなで意見交換をしながら、よりよい発信にしていきます。最後には、4年生に向けて発信するという場を設定することで、目的意識を持たせ、それを継続させていました。随所でこのような“開かれた学び”が展開されていると感じました。外部からの情報を取り入れる、実際に活動や体験をする、あるいは児童個人・グループの学びやまとめに対して複数の他者の目を入れることで、児童の気づきや本質的な学びを修正・改善していく過程を授業者が作り出しているのだらうと思います。また、話し合い活動においては、事前に個人の意見をふせんに書いておき、グループで話し合うときにはボードを用いて意見を集約することで、児童の学び合いがスムーズに行われているように感じました。複数の授業者が授業の目標や構成、さらに活動の過程まで十分に検討した上で、入念に準備してこられたことが理解できました。さらに、児童相互の関係を考えたグルーピング、授業者の適切な働

きかけなど、多くの授業を構成する因子を熟慮して、学びが作り上げられているということを改めて感じた授業でした。

また、研究協議会では、『児童の考えを広めたり深めたりするグルーピングや話し合いの形態について』と『環境学習においてめざす「最終の児童の姿」について』という協議事項について話し合いました。幸運にも、同じグループ内に授業者の先生や県外の先生がいらっしまったことで、幅広い議論となりました。中でも印象的だったのは、グルーピングについてです。生活班なのか、あるいは興味・関心のある者同士にするのか、ペアグループもどうペアリングするのかといったところで、授業者の手腕が試されるのだと思いました。授業者の先生曰く、今回のグループにおいては、リーダー性のある子が活躍しすぎて独壇場のようにになってしまう班や、その一方で支援しなきゃ！と授業者が考えていたグループにおいては、凶らずもリーダー性が育ったり、フォロワーシップをとれる子が育ったりという姿が見られたとのことで、改めて、児童の可能性の開発という点でのグルーピングの難しさを感じました。

今回は、初めての小学校における公開研究会参加ということで、表面的にしか見るができなかったかもしれません。しかし、オープンスペースで伸び伸びと学ぶ児童の姿、児童の中を縫って学びをコーディネートしていく授業者の先生方、それを支える教師集団を実際に目の当たりにしたことで、様々なこと感じ、考え、さらに自身の実践の中で活かしていきたいと思いました。やはり、殻にこもるのではなく、他者の実践・他校の実践に触れて学ぶことが大切です。機会があれば、ぜひまた研究会に参加したいと思いました。ありがとうございました。

教育実践研究フォーラム in 長崎大学に参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井県立藤島高等学校 野尻 友佳子

博多から2時間弱、「特急かもめ」が終着駅長崎へと近づく頃。長崎出身の歌手さだまさしの「天までとどけ」が流れ、続いて「長崎へようこそ」といったアナウンス。いやがおうにも旅情が高まる1月8日土曜日。私は列車に乗って各地を旅することが好きですが、今回の長崎でもたくさんの収穫がありました。多忙な日々の中でも時間を作って違った土地へ出かけることは、教師という仕事にとってたくさんのプラスの要素を与えてくれます。

1日目は「教育実践と省察のコミュニティ2014」と題して、ポスター発表、文科省高等教育局の森氏による基調講演「教員養成の改善・充実について」、5名の発表によるシンポジウムが行われました。われらが松木健一先生の発表時には、参加者たちのうなづきや共感の反応を感じ、自分のことのように得意げになってしまいました。

夜は、長崎出身の藤井先生のご案内により、福井組総勢12名で「中華街」でのおいしく楽しい時間を過ごしました。ちゃんぽんに皿うどん…長崎には名産のおいしいものがたくさんあります。短い自由時間を有効に使って、次々に復元が進んでいる「出島」の見学にも行くことができ、満足の1日目が終了しました。

さて、翌日曜日は、ラウンドテーブルの日です。朝のわずかな時間に平和公園に立ち寄ることにしました。有名な平和祈念像を目にするのは、自分自身の中学校時代の修学旅行、教員になってからの修学旅行引率に続いて今回が3回目でしたが、今回ほどいろいろなことを考えたことはなかったように思います。平和祈念像の他に旧浦上天主堂遺壁、母子像なども眺めながら、平和を思うことの大切さを実感した有意義な朝でした。

思いのほか時間を使いすぎたため、急いで路面電車に乗り、長崎大学に到着。ラウンドテーブルは福井大学でのものと同様の形式で開催されました。私のテーブルは6名。ファシリテーターとして長崎大学の教授。報告者

は私の他に、長崎大学教職大学院生の中学校の先生。聴き手として、准教授、ストレートの院生2名、という構成でした。福井大学でのカンファレンスやラウンドテーブルを何度も経験していると、それが最上のものだと思ってしまうのですが、やはりいろいろなやり方を見て客観的視点を忘れないようにしなければならないと思わされます。

長崎大学の教職大学院のシステムは、福井大学とはかなり異なっています。1日目は勤務校を離れて大学院で研究に専念し、2日目は勤務しながら研究を続け、論文にまとめる、といった形のです。私のグループで発表された先生は、通級指導のご経験から、授業における生徒の「課題非従事行動」を観察し支援にスムーズにつながる研究をなさっています。通常学級においても必要な視点であると考えさせられる興味深い研究でした。

お二人の長崎大学の先生からは、専門的見地から批判的視点も有したアドバイスをいただき、自らの価値観にとらわれずに立ち止まって考えてみることの必要性を再認識することができました。ストレート院生の二人も明るく意欲的で、おおいに刺激をもらいました。行動力あふれる中国からの留学生トントンフェイさん、音楽専攻で歌うこと好きな山崎さんのお二人は、ぜひ福井ラウンドテーブルに行きたい、とおっしゃっていましたので、再会できることを楽しみにしています。こうやって人とのつながりがたくさんできていくことは楽しいなと感じます。

福井県とは違った土地、福井大学とは違った大学での経験は、これまでとは別の新しい思考フレームを与えてくれる貴重な経験だと言えます。異質な他者と多く触れ合うことで、自らの常識を疑ってみたり、知らなかった世界を知ったりするそんな経験を多く積めることも、教職大学院で勉強してよかった、と思えることの一つです。

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校 河邊 里紗子

さだまさしの歌声が駅のホームに響き渡っていた。電車で揺られること約7時間。私は修学旅行以来、人生で2度目の長崎県を訪れていた。長崎は異国情緒溢れ、街の人たちもあたたかく、私が住んでみたいと思っていた街の1つでもあった。

ラウンド1日目は、ポスターセッションとシンポジウムが行われた。そして夜の懇親会では、長崎大学の教職大学院生と美味しいご飯をいただきながら、お互いの院生生活について交流した。他の教職大学院の院生と話をするのは初めてで、同じ“教職大学院”と言っても、取り組み方やインターン日数を始めたとした多くの違いがあり、改めて福井の教職大学院の仕組みや私たちのインターン環境は整った、恵まれたものだと感じた。そして懇親会の後には、福井からラウンド

に参加した院生・大学の教員・リーダーの先生方で中華街に行き、本場の長崎ちゃんぽんと中華料理に舌鼓をうった。素敵な時間を過ごせたことは言うまでもない。

2日目は、実践報告会が行われた。長崎では初めてのラウンドテーブルだったらしいのだが、話しているときの和やかなあたたかい聴き手の方々の空気、活気に溢れ熱い思いが飛び交う話し合いは、全く福井のラウンドと変わらないように感じた。私のテーブルは報告者として私の他に長崎大学付属幼稚園の原田園長先生、聴き手として長崎大学のガンガ教授、長崎大学附属特別支援学校の末次教諭、長崎大学教職大学院の院生の南先生、舛元さん、ファシリテーターとして九州大学の田上教授というメンバーだった。県外の方たち

ばかりということあり、教職大学院の仕組みやインターン先の学校の説明なども詳しく話した上での報告となった。内容がうまくまとまらないことが私の課題となったが、報告後に「きっといい先生になるよ」とあたたかいお言葉をかけて頂き、とても嬉しくなった。原田先生の報告では、小学校以降の学びを見通した幼稚園教育の実践について語られた。園児がケンカになった際に、職員の先生方はすぐに仲裁に入ってしまうのではなく、様子を観察したり、自分たちで解決出来るように促したりするという話はとても印象的で、教師の「待つ」力というのは、子どもの学びを支える要素の大きな1つではないかと感じた。また、中学校にインターンに行く中で、小中連携・中高連携の大切さを感じてきた。しかし、子どもたちの成長や学びというものは自分の校種とその前後の繋がりの中のものだけではなく、幼稚園（幼児期）から大学まで（もしくはそれ以降も）ずっと続いているものであり、教師は長期的な視野を持って子どもたちの学びを

支えていかなければいけないととても強く感じた。

長崎の3日間は本当にあっという間に終わってしまった。学びや気づきが多く、とても充実した3日間となった。



実践研究ラウンドテーブル in 静岡に参加して

福井大学教職大学院 准教授 風間 寛司

昨年度に続く2度目の取り組みは、11月23日（日）10時から16時まで静岡駅前のホテルアソシア静岡で、静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター、静岡大学教育学部と本学教職大学院との共催によるラウンドテーブル「教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う」が開催された。静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会からご後援頂き、参加者は定員を大幅に上回る88名（県外参加者20名）で、職種も現場の先生方、教育委員会などの教育行政、研究者等、様々であった。

このラウンドテーブルは、本学教職大学院が予算獲得した教師教育改革コラボレーションの予算を活用して開催されたものである。本学関係者の参加は8名である。オープニングセッション、ミニ講演①「今求められているおとなの共同の学び—子どもたちの豊かな学びを創り出すために」早稲田大学村田晶子教授、自己紹介、報告Ⅰ（報告40分、意見交換30分）、ミニ講演②「市民参加による学校づくりの意義と可能性」常葉大学仲田康一講師、報告Ⅱ、感想記入、クロージングセッションという構成であった。1日開催の中で、講演、報告のサイクルを午前、午後で2サイクル繰り返すコンパクトで飽きの来ないデザインだった。1グループ6～7名で14グループ構成され、第1回の省察を踏まえて、発表時間を10分長くし、じっくり語り合える時間が保証され、共感的に語り合い、聴き合うことができた。

私の参加したグループ2のメンバーは、福島大学の研究者教員の方（ファシリテーター）、県内の事務主幹の方と静岡大学山崎保寿教授のお二人の報告者、元静岡市教育委員長、静岡県立高校から県外大学院に派遣されている教諭の方であった。

事務主幹の方の報告は、学校経営にスクールマネージャーとしてどう関わるかというものであった。静岡県

公立小中学校事務職員会が作成した「しずおかコスモスプラン」を紹介していただいた。コスモスプランでは、学校事務職員を「スクールマネージャー」として位置付け、安全・安心な学校づくりのための地域に開かれた学校における事務職員の役割を担う、理想とする事務職員像が示してあった。静岡県における教育の基本目標は「『有徳の人』の育成」である。ご自身の経歴とそこで取り組まれた数々の挑戦を伺い、とてもパワフルで根本から問い直すような強みをお持ちの方だと感じた。その強みを生かし、職務の自覚と責任、誇りを感じて実践されていることがひしひしと伝わってきた。

学校事務職員は、大規模校でなければ複数配置にはならない。その中で、一人一人の事務職員がスクールマネージャーとして動いていくのは組織の中でのミッションを自覚していくことから始まる。また、事務職員の年齢構成の今後の推移をデータで示しつつ、世代交代が起きることを予見した中で、「中学校区を単位とした学校事務連携処理」の試行がようやく始まり、チームで事務職員を育成していく仕組みの中で、実践している様子が目に見えるようであった。話を伺いながら、私が中



学校現場で一緒に勤めた事務職員の方を思い浮かべながら聴いていることに気付いた。生徒や保護者、教職員の困り感に寄り添いながら、職責を全うされようとしている方、特に、学校環境を整えたり、保護者の負担軽減に努めたり、様々に挑戦する姿が思い返された。事務主幹の方が、ラウンドテーブルで報告されていることに感銘を受けた。

静岡大学の山崎保寿教授からは、静岡大学教職大学院と静岡県総合教育センターとの連携を基盤とした「教員養成の高度化を踏まえた教職大学院と教育センターとの連携型モデルの開発」についての昨年度のシンポジウムまでの一連と取り組みの成果検証が報告された。具体的には、教職大学院の授業で開発した研究教材を活用した研修プログラムを提案する【開発型講座】、ミドルリーダー育成プラン及び学校改善支援プランを提案・検討する出張授業を実施する【出張型講座】、教職大学院の授業に外部講師が担当する連続的な枠を設定する【連続型講座】の3つのプロジェクトを実施して、教員養成の高

度化をねらうモデルカリキュラムである。センターでは様々な活動を行っているそうである。教育委員会への人材リストの提供、学校教職員へのラウンドテーブルの提供、大学院修士生に対するフォローアップ体制と県外派遣の現職教員のネットワーク構築などの取組である。その中で、他大学との連携の難しさとその克服について語られていた。

休日に志をもってラウンドテーブルに臨んだ皆さまと、とてもよい雰囲気の中で実践について語り合えたことがうれしかった。静岡大学世話人の洪江かさね准教授からは「学校マネジメント力の育成」を特色の一つにしていきたいというお考えを伺った。また、教育学部の4年生が3名参加し、「卒業してもまた参加したい」と、小グループのラウンド形式による省察的实践を聴くことの価値を感じてくれていることがうれしいと感想を伺った。第3回の開催が県内に広く周知され、より大きな輪となり、継続して参加する方が一人でも多くなることを切に願っている。

スクールリーダー養成コース2年／福井県教育庁嶺南教育事務所

加藤 勝代

今の職場に変わってから、県外の研究発表会等にはよく参加するようになりましたが、福井大学以外の教職大学院を知る機会はありませんでした。つまり、教職大学院＝福井大学教職大学院ということです。そのような私にとって、「実践研究ラウンドテーブル in 静岡2014」への参加は、参加することで感じた福井大学との違いから、改めて福井大学が大切にしているものを再確認する機会となりました。

それは、「院生自身の問いを待つ」ということです。

静岡大学ラウンドテーブルが始まってまもなく、担当者の方からラウンドテーブルの趣旨や方法について詳しい説明がされました。これは、第2回である今回のラウンドをよりよいものにするために、第1回の反省を踏まえ共通理解の必要性を感じて行われたことと思います。そう予想してもなお、このことは私にとってこの日最大の違和感を感じる場面でした。それは、私が福井大学教職大学院での2年間で、最も苦慮し最も成果を得た自分の思考を辿るということに大きく関係していることだと感じたからです。

教職大学院に入学してから半年あまり、私はカンファレンスの意味、省察の意味が全く理解できず、月に1度集まって互いの実践を語り合い聴き合うことのねらいが分かりませんでした。それは、私自身の勉強不足によるところが大きかったのだと思いますが、スタッフからの詳細な説明はなく、院での学びとは何なのか悶々とした日々を過ごしていました。

このときに、今回のような趣旨説明を受けたなら、そういうことかと一人合点し、早々に研究実践に取り組み始めたかもしれません。そして、それは一見すると順調な歩みにも思えます。

しかし、この2年あまりの「何故?」「どうして?」「何のために?」といった、自分は何を疑問に思っているかもはっきりしないところからの疑問づくりと、その答えを探すための遅々とした自問の日々、遠回りに思える語り合いを通じた挙げ句の答えにつながる種探しの日々が、省察の本当の意味を実感的に教えてくれたと今感じています。

す。早く答えにたどり着きたい焦燥感を押さえ、じっくりと思考することの大切さです。

自分の思考と向き合うには、一旦自分の思考を突き放して距離を置かなければなりません。そのために、カンファレンスで実践を交流したり今回のように比較体験したりすることで、違いに気づいたり新たな発見が導かれたりするのだと思います。

早稲田大学の村田晶子教授の講演では、大人が知識基盤社会を生きるうえで求められる力について考えさせられ、教職員研修につながる学びの種がありました。ラウンドテーブルでは、静岡のあらゆる立場の教職員がそれぞれの立場から実践している教員の資質・力量の向上策を聴き、情熱をもらいました。また、自分の実践を基にしたやり取りからは、実践を振り返るときの押さえるべき観点の確認ができました。

他者の声に耳を傾けること、そしてそのことを通して自分の内なる声に耳を傾けること、そしてそれらの声を基に、目的に照らし合わせて柔軟に改善していくこと。これまでの院での学びを通して、今自分が大切にしていることをまたゆっくり考える機会を得ることができました。貴重な機会をいただき、また楽しく学びのある時間を一緒にさせていただいたスタッフの先生方、ありがとうございました。教員養成や大学改革等の様々な教育課題に、学校の教職員はもちろん、福井大学、そして全国にいる関係者が、それぞれの場で力を注いでいることを感じました。全国にいる大勢の関係者の一人として、自分も目の前の仕事に向き合っていこうと思います。

◆大阪教育大学

第14回 スクールリーダー・フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 教授 森 透

去る11月22日(土)大阪教育大学(天王寺キャンパス)で開催された第14回スクールリーダー・フォーラムに私は個人的には4回目の参加になると思うが、今回はスタッフ4名(森透・木村優・半原芳子・藤井佑介)とスクールリーダー4名(野尻友佳子・谷康博・石崎隆幸・金子奨)の合計8名で参加した。報告者はスクールリーダー4名と今回はスタッフの半原先生も報告者を勤めていただいた。藤井先生には記録者を、そして木村先生と私はファシリテーターという役割であった。今回のニューズレター報告については、私が全体的な概要を紹介し個別の感想は参加された方々にお任せしたい。今回の参加者は32報告で100名弱ということであった。また冊子『第14回スクールリーダー・フォーラム ミドルリーダーの実践と育成支援—大学・学校・教育委員会のコラボレーション—』(全137頁)を当日配布された。毎年、報告者の資料等が集録されている冊子を発行することは大変な労力だと推察される。深く敬意を表したい。

今回のフォーラムのテーマは「ミドルリーダーの実践と育成支援—大学・学校・教育委員会のコラボレーション—」であり、形態は「ラウンドテーブル型(語りと傾聴による学び合い)」と提示されていた。10時30分開始で、午前中は全体会、午後は小グループでのラウンドテーブル3時間であった。3時間の内訳は報告者2名で1人70分の持ち時間。自己紹介20分・報告A70分・休憩10分・報告B70分・まとめ10分。全体会は儀式的な側面もあると思われるが、もう少し参加者と対話的な環境をつくれないう印象を持った。会場が階段式の固定椅子なので難しいと思うが、報告者の話を一方的に拝聴するというあり

けるようにしている。ともあれ今回の3名の方の報告—①基調講演・油布佐和子早稲田大学教授「教師の成長とその条件」、②宮岡愛子大阪市立玉出小学校副校長「次世代の教育の構築を目指して」、③寺野雅之大阪府立茨田高校校長「教員の力を引き出す」—は、いずれも興味深く聴かせていただいた。基調講演の油布先生のご講演では、ご自身の実践に引き寄せて、具体的に早稲田大学の教職大学院でどのようなことをされているのかをお聴きしたかったと思う。3名のお話しはどれも貴重で問題提起的な内容であったので参加者とシェアできる場があればさらによかったと思った。報告のあとのピアノとチェロの共演はいつも感銘を持って聴かせていただいている。音楽というのは心に染み入るもので、このフォーラムに音楽をご専門にされている方々のご協力があることが大事だと改めて感じたいである。

午後のラウンドは全部で16グループ、1グループの人数は基本5名であった。2名の報告者と司会者・書記・参加者1名の合計5名で、グループによって参加者2名の場合も若干あったが基本的には小グループでの深い語りと傾聴を可能とする場の設定であった。私のグループの報告者は小田恵美子先生(豊野町教育委員会指導主事)と吉田実先生(大阪府立とりかい高等支援学校)であったが、内容は省略するが、非常に熱くかつ内容の深い実践報告であった。タイトルは小田先生が「教頭としての学校組織改革—職員室の担任としての次世代リーダーの育成—」、吉田先生が「高等支援学校の生徒指導・生徒支援と学校づくり—とりかい高等支援学校開校の取組み—」。福井でのラウンドで味わう感動と喜びの体験を今回も持つことが出来たことを大阪の皆様へ深く感謝したい。また、フォーラム終了後は天王寺駅近くの有名なお店の中華店で交流会を持つことが出来たことにも感謝したい。



方はアクティブラーニングを目指しているフォーラムとしては再検討を要するのではないと思う。司会者のファシリテートによって会場を和らげ、座席の隣近所で話してもらい質問や意見を求めるということも可能かもしれない。福井では報告のあとは原則的に必ずカンファレンスというものをセットにして報告を振り返り自らの実践との関係性を意味づけるという場を設



スクールリーダー養成コース1年／埼玉県立新座高校 金子 奨

1月22日、大阪教育大学で開かれた「第14回スクールリーダー・フォーラム」に参加させていただいた。開会あいさつから、油布佐和子氏の基調講演、大阪の学校現場からの発信、ピアノとチェロの共演、ラウンドテーブル、武井敦史氏の総括講演までの起伏に富むプログラムのあいだじゅう、かすかにしかしずっと鳴り響いていたものは何だろうか？長野県北部地震で緊急停車した「のぞみ」の薄暗がりのなかで、ぼくはそれこそ暗中模索を繰り返していた。

けっきょくそれは、教育といういなみの孕む「アポリア」ではないのか？

大阪という地域の教育現場と教育行政、批判的リテラシーとPISAリテラシー、学校の生徒志向と目標達成志向、教師の適応的熟達と定型的熟達、動機の内発性と外発性、リフレクションとマネジメント、生徒の活動経験と教科の系統性、学びと教え、子どもの現実と社会的な要請、ローカリズムとグローバリズム、いまこことあそこ、内と外…教育にかかわる現場を悩ませるいっけん二項対立的な構図が、天王寺キャンパスを浸潤していたのではないのか。つまり、内に自足しようとする運動とそれを外へと誘い出そうとする動きの対立が、教育という活動を浸し、ミレニウムホールに集うひとびとをそれぞれの立ち位置や信念、志向にそって布置させ、あそこでさざ波をたて、ここのうねりを起こし、そちらで渦巻きを生じさせていたのではなかったか。

ところで、精神分析医の中井久夫は「自己意識」を次のように定義している。¹

自己意識というものは、安定した円環からのある種の逸脱であって、円環に回帰しようとする傾向性と円環より出立しようとする傾向性とが抗争して奇妙な力動的状況を構成しているところに生じる不安定な結節点のごときもの、ひとつの逆説的事態（である）

ひとの自己意識がこのような逆説的事態であるとするならば、人間がつくりだすすべてのものごとに「奇妙な力動的状況」が浸透している可能性がある。とくに、「いまここ」を生きる子どもと「あそこ」をめざすおとなが出あう教育という場では、この奇妙な言わば「脱自的統合」は顕在化しやすいのだろう。

かつてP・フレイレは「文字を読み書きすることは、世界をより批判的に再読すること」であり、「世界を書きなおす」ための「旅立ち」なのだと主張し

た。²そして、教育者が自らの「いまここ」を知悉するとともに、だからこそなおさら教師の「いまここ」からではなく、被教育者の「いまここ」から出発して、「彼方」にいたることの重要性を強調してやまなかった。しかしだからといって彼が「円環に回帰しようとする傾向性」を帯びていたわけではないだろう。逆である。フレイレは円環構造からの「旅立ち」をめざし、それゆえに「希望」を語ることができたのだ。何ゆえに？

それは彼が対話というデモクラティックな関係性に依拠していたからである。異なるひとが出あい、対話することによって、たがいに越境、媒介しあう、そのプロセスに円環構造から逸脱するベクトルが生じるのだ。つまり、中井のいう「奇妙な力動的状況」や「不安定な結節点」は、孤独な営為においてではなく、他者との接触において生みだされる。いや、他者という外部との接点に外への通路がひらけると同時に、内部の円環構造がかえって活性化するといったほうがいいのかも。わたしがわたしでありながら、わたしならざるものへの変様が、わたしたちにおいて生起するのだ。

そのようにして見慣れた世界がひび割れ、安定した構造からの逸脱が出来る場を、現場と呼ぼう。そうした場を生成させるのは、教師である。子どもが子どもらしくいられることを保障し、なおかつ逆説的に、子どもを彼方へと出立させるのは、境界線をまたいでいまここ／あそこを媒介する教師の存在である。

だから、教育にたずさわる者は、一義的ではありえない。それは、ホールで演奏されたショパンの作品65番のチェロとピアノの演奏が切り離せないのと同じだ。ふたつの楽器の奏でる音は、競いあいながらもひとつの曲を織りなしていくが、演奏者を協奏させているのは、ふたりの〈あいだ〉に生成している間主観的な主体性というほかないものだ。³

冒頭、教育の「アポリア」と書いたが、じつはそれは教師が、内／外の境界線上にまたがる以上、両者に引き裂かれざるをえないという意味での「難題」なのである。しかし、その二項対立的な構図は、教師が子どもたちとともに生成させる間主観的な存在様式／現場のさなかに、ひょっとしてそのつど止揚されているものなのかもしれない。

1 中井久夫『徴候・記憶・外傷』

2 フレイレ『被抑圧者の教育学』『希望の教育学』

3 木村敏『あいだ』

スクールリーダー養成コース2年／あわら市芦原中学校 石崎 隆幸

去る11月22日（土）大阪教育大学にて行われた「スクールリーダーフォーラム」に参加、ラウンドテーブルでの報告の機会をいただいた。

「石崎先生、お願いできますか。」と森先生からお誘いを受け、「合同カンファレンスのように、気楽にお話しすればよいだろう。」と簡単に考えていた私は、当日、ラウンドテーブル会場で冷や汗をかくことになる。受付でいただいた名簿から同じグループの方

の名前はわかる。報告を要約した原稿を事前に提出し、製本され手元にあるので報告の内容もわかる。ところがである。同席の方の要約が載っていない。「どのような報告をされるのだろうか。」と不安になる。そして、ラウンドテーブルが始まり、さらに不安になる。私のグループ、司会は深野先生（帝塚山学院大学教授）、書記は酒井先生（大阪府教育センター指導主事）、もう一人の報告者は水野先生（大阪教育大学教

授), 参加者として餅木先生(大泉学園校長)。この場に私はふさわしくないのではないかと。校長先生や大学教授, 指導主事の先生方に私の報告はどう受け入れられるだろうか。取組としてあたりまえのことしかしてなくて, 「こんなこと, どこでも取り組んでいる。」と言われないだろうか。とてもとても不安になる。

自己紹介の場面で深野先生から「『しんどかったけど良かったこと』をお話しながら自己紹介をしていきましょう。」とお話があった。私は「この席に座っていることがしんどいです。でも, 発表したあとに『聞いてもらってよかった』, 『聞くことができてよかった』と思っただけのようにがんばります。よろしくお祈りします。」とお話するだけが精一杯だった。

水野先生からは『学校が本当の意味で連携するには何が必要か?』と題し, カウンセラーとしての立場からの実践報告をされた。「被援助志向性(援助されたいと思っている度合い)」について研究されているそうだ。日頃の学校訪問から学校の考え方の「ずれ」を感じていること, 教師の「助けられ下手」には自身の幼少期体験に要因があるのではないかとこの考え, チーム援助による学校との連携をいかに提案していくかご尽力されていることなどが報告された。

私は勤務校での取組, 研究主任として心がけていることについて報告させていただいた。指導主事訪問という制度に先生方は特に興味を示され, その機会を中心とした学校全体での取組にも関心を示してください。私の話をうなずきながら聞いてくださった。その姿に安心して裏話まで飛び出し, 40分間の発表があったという間に終わった。水野先生から「先生方が(やらされ感をもたないで)楽しく取り組まれていることが一番いいです。」とご高評をいただいた。さらに, 福

井の教育についても興味を示され, 幅広く先生方から質問された。「福井県から参加している先生」としても見ていただいているのだと感じた。また, その発言に責任感も感じた。

午前中の基調講演では「80%達成できたということは, 残りの20%には効果がなかったということ。そこにも問題点があるのではないのでしょうか。」と油布先生からのお話を聞き, 私の研究の甘さを指摘されたようで萎縮してしまった。その後, 玉出小学校副校長先生自らが学校改革に取り組んだ実践報告, 茨田高校校長先生からの実践報告。午後はラウンドテーブルでの発表。締めくくりの総括講演。さらに, フォーラム終了後は場所を移動し, あべのハルカス12階での懇親会。盛りだくさんの一日で, 朝4時起きの方は帰りのJRではうつろであった。が, その帰りのJR車内では反省会。木村先生からは森先生へ間髪入れずのスピーチ依頼。藤井先生からは細やかなお心遣い。聴いていた(「聞いていた」とは違うのです)私。知らず知らずのうちに疲れが吹き飛ばされていた。一日の締めくくり, ラウンドテーブルのキーワードの一つ「傾聴」が車内でも実践できたと自画自賛。この日感じたことや考えたことを長期実践研究報告や今後の生活で生かしていかなければ…。貴重な経験をさせていただいた森先生に申し訳ない。

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

大阪教育大学で開催された「第14回スクールリーダー・フォーラム」には今回ラウンドテーブルの報告者として参加させていただきました。前半のフォーラムの様子は森先生のご報告に詳しいので, ここでは後半のラウンドテーブルのことを報告したいと思います。

私のグループは5名のメンバーで, 司会は大阪市教育委員会の方, 報告は大阪教育大学の院生であり茨木市内の中学校に勤めておられる真島克宣先生と私, そして聴き手は東京学芸大学の先生と大阪で特別支援教育に携わっていらっしゃる先生でした。真島先生は, 勤務校の特性と現状をよく把握された上で校内研修を積極的に進めておられ, 研究推進委員会の立ち上げ・小中連携による授業研究会・夏の小中合同研修会・校内授業研究会などを手がけていらっしゃいます。報告ではそれらの具体的な内容をじっくりうかがうとともに, 真島先生が異動されても校内研修がより良く持続・発展していくためにはどうしたらよいか議論になりました。具体的な方向性は見出せませんでした。教育委員会の方をはじめ多様な領域のメンバーによって多角的に模索できたことで机上の空論に終わらない実質的な話し合いになったと思います。私は外国人児童生徒への学習支援の実践を報告しました。最近ではファシリテーターをすることが多いため久しぶりに報告者としてたっぷり語りました。みなさんととも

丁寧に共感して聴いてくださり, 絡まっていた自分の実践の糸がほどけていく感じがしました。余談ですが, この数日後に行われた福井大学教職大学院メンバーでのFDで再度報告の機会をいただいたのですが, その時大阪教育大学でのラウンドテーブルでほどけた実践の糸を今度は編み直していく手がかかりを得ることができました。FDで報告している際大阪で出会った同じグループの皆さんの顔を一人一人思い出していました。

ラウンドテーブルでテーブルを囲む方達との出会いは偶然であり必然だと毎回思います。今回も素敵な出会いに恵まれました。ありがとうございました。



スクールリーダーだより

福井県立敦賀工業高等学校 / 谷康博

敦賀工業高校は昭和37年に福井県の3番目の工業高校として、嶺南地域の中堅技術者の育成を目指して、現在の地に開校されました。開校当時は機械科・電気科・工業化学科・建築科の4学科体制でしたが、平成7年に科学技術の進展や少子化に伴って学科改編がなされ、電子機械科・電気科・情報ケミカル科・建築システム科となり、現在では各学科1クラスの編成となっています。

また、「活力」「自律」「進化」を校訓として教育ビジョンの柱に掲げ、地域に開かれた信頼される学校を目指して、さまざまな活動を展開しています。

「活力」

地域と連携した「活力」ある学校を目指す

「自律」

自ら考え、自ら判断できる「自律」した生徒を育成する

「進化」

新しい時代にふさわしい「進化」する学校を目指す

本校はものづくりの体験や資格取得を通して「学び力」「課題解決能力」「コミュニケーション能力」さらに「人を思いやる心」を持った社会人育成に努めています。よって、本校の特質としては、将来の進路を考える上で、生徒それぞれが自分の目標を定めることができ、就職にも進学にも高い志を持って進路選択ができることがあげられます。

本校は新任教員が毎年赴任している高校です。そのためか学校の恒例行事として1学期に授業研究週間があり、期間中は自由に授業を参観することができるのと同時に、「目玉授業」も設定されており、研究協議が行われています。今年度は研究週間のはじめに「授業研究で自分を磨く！学校を創る！」とのテーマで教職大学



院小林真由美先生にご講演をいただきました。また、研究週間最終日の研究協議にも教職大学院の西川満先生、杉山晋平先生からご助言をいただくことができ、内容がさらに充実した活動となりました。また今年度は2学期にも授業研究週間を設定することになり、自分がメンバーの一員として取り組んでいるICT機器を利用した授業の研究を行うプロジェクト型活動の情報発信も行うことができました。

平日は学校で通常勤務を行い、休日を利用して教職大学院で学ぶようになって2年目、何かとお世話になっている

同僚の先生方や学校に私ができることは、教職大学院の先生方から直接学べる機会をつくること、新しい試みを利用して活用してもらうことです。この流れで本校にICT機器が整備され手軽に使用できる環境が整ったり、敦賀工業高校の枠を超えて「工業学科授業力向上研究会」として福井県の工業学科に、授業の質を高める研究活動の輪が広が

つつあることは、とても嬉しい限りです。「自分がすべきことは何なのか?」「自分ができることは何なのか?」それがわからないまま考えながら時間だけが過ぎて

いるように思います。しかし、この時間が有意義で充実していることは確かです。これからも自分の等身大で「考え・歩む」ことを続けていきたいと思っています。



福井市藤島中学校 / 竹野亨

本校は福井市西北部に位置し、田園の中に校舎が建っています。藤島通りから、本校に向かう道へ入ると、田園の緑と本校の校舎にはられたタイルの茶色のコントラストが目

をひき、のどかな中でも洗練された様子が感じられます。本校の教育目標である、「豊かな心を育てる」には、絶好の環境といえます。

を迎えました。5月1日には、「30周年開校記念式」を行い、これまでの伝統を引き継ぎつつ、新たな伝統の創造に向けて、教師・生徒ともに歩いていくことを確認しました。また、「いじめ撲滅」「自殺反対」「いつも心にマウンテン」の三本の幟を掲げ、全国の路上や学校で歌やトーク、踊りを交えたパフォーマンスで訴え続けている登天ポール氏による記念講演会を行いました。「『いつも心にマウンテン』を

教えてもらい、とても元気が出ました。いじめは絶対ダメだと思います」という生徒の感想にあるように、生徒たちは、楽しくそして真剣にいじめや人権について考えました。

先日の10月29日には「由紀さおり安田祥子手づくり学校コンサート」を行いました。ご来賓、保護者、地域の方、約250名が来校され、教師、生徒も含め700名を越える人たちが、本校体育館に集い、お二人の歌声に聞き入るとともに、童謡や唱歌にある日本語やメロディーのよさにふれ



ながら、楽しく時を過ごしました。本校の合唱団を中心に会場全体で歌

う場面では、たくさんの方に生徒が真面目に取り組む姿を見ていただくことができました。また、保護者の方の感想に「お腹から声を出して歌ったのは数年ぶりでした。他の保護者の方も大きな声で歌われていて会場が一体となったすばらしいコンサートでした」とあるように、学校、保護者、地域がともに同じ時間を共有できたことをうれしく思っています。

さて、私は、本校に勤務して4年目を迎えています。この4年間で大きく学校が変わったと感じています。例えば、生徒の取り組みが自主的なものになってきました。生徒の愛校心が強くなりました。教師が授業で生徒を伸ばしたいと考えることができるようになりました。これらの成果の要因として、本校独自の縦割りの活動（クラウド活動）、授業改善の取り組み、学年の横のつながりを意識した取り組み、生徒会のリーダー育成の取り組み、生徒会の各委員会の主体性を持った取り組みなど、たくさんの方が考えられます。ここでは、縦割りの活動であるクラウド活動と、授業改善の取り組みの2つのことについて紹介していきたいと思

います。まずクラウド活動について紹介しましょう。本校のクラウド活動は、平成24年度からはじまり3年目を迎えています。クラウド（CROWD）とは、群衆、人ごみ、仲間といった意味があります。クラウド活動では、各学年1クラスずつ計3クラスでひとつのクラウドを形成します。例えば、1年1組、2年2組、3年3組という3クラスでひとつのクラウドとなります。各学年が5クラスずつなので計5つのクラウドを形成します。それぞれをレッド、ブラック、イエロー、グリーン、ブルーと呼び、年間6回のクラウド集会、合唱コンクール、学校祭、社会貢献活動が主な取り組みです。また、各委員会活動によるコンテストをクラウド対抗で行ったり、階段の壁面にクラウド掲示板があったりしてクラウドによる活動が意識されるように工夫されています。

クラウド活動の取り組みのひとつである、11月12日に行われた社会貢献活動について紹介したいと思います。各クラウドをさらに縦割りの3つのグループに分け、計15のグループを編成しました。そのグループで地域へ出かけ、各地区の公民館等と連携を図りながら、清掃奉仕活動を行いました。事前に2年生が中心（社会貢献活動が2年生が中心となる最初の行事）となって、行き先の調査や清掃活動に必要なものの準備、グループの仲間への準備物の伝達を行いました。

そして、当日を迎えました。地域へ出てみるとたくさんの方に気づきました。「初めて川の階段のところを登ったり、降りたりしたので怖かったです。いろんなゴミがありました。川や川のまわりの環境は決してよいものとはいえませんでしたが」「終わりぎわに、地区の人、教えてください

たボランティアの人に『お疲れ様です』と言われたとき、とてもうれしかったです。大変やりがいを感じました」「あじさいロードのあじさいの株の雑草や枯れ葉取りをしました。地域にでて社会に貢献できるように頑張ることは、すぐ気持ちのいいことなのでこれからも社会貢献活動を通して、地域の方との仲を密にしていけるとよいと思います」と生徒の感想にあるように、地域に愛着を感じ守ってきたいという思いをグループで共有しながら活動をしました。

3年生にとっては3回目の社会貢献活動です。新リーダーの2年生を見守りながら、時には手助けをして活動していました。1年生は初めての活動で、不慣れではありませんが、先輩の姿を見て楽しそうに活動していました。そんな1年生も来年、再来年と成長していくのかと思うと頼もしく思います。3年間3年生がその先輩の姿を見て歩んできました。1、2年生がその後を歩もうとするとき、3年生が道すじをしっかりとつけてくれています。秋晴れのすがすがしい天気とともに、3年生の残した功績を再確認した秋の一日になりました。

また、本校は平成25年度より「協働学習する授業の創造」という研究テーマのもと、授業改革に取り組んでいます。「生徒同士が自分の考えを伝え合い、学び合う授業」を目指して、ペア学習やグループ活動、クラス全体での話し合いといった場面を授業でつくっていかうとしています。その取り組みを教師同士で共有しあおうと取り組んでいることが「一人一公開授業」です。本時の目標と本時の流れ程度の簡単な指導案をたて、授業を公開します。そして、必ずその授業をグループのメンバーが参観するようにしました。全教員を教科、学年、年齢を解いて4つのグループに分け、グループのメンバーは、指導案をもとに、生徒がどのような活動をしているかを見ます。授業中グループ活動でどのような話し合いが行われているかに耳を傾けます。生徒がどこで考えを発展させ、また、どこでつまづいているのかを探ります。研究会は別日になっても必ず行います。公開してくださった先生へ、授業の生徒の様子を伝えることで授業を見せていただいた感謝の気持ちを知らせます。今年度はさらに～個の学びを高めるために～というサブテーマを設定しました。研究会は、協働と個の学びについて、少人数ならではのみんなが意見を述べます。「あー、そんな考え方もあるんだ」と納得することや「それは、ちょっと違うんじゃないかな」と思いつつもずっとそのことが本当に違うのかを考えています。研究会はそんなに長くない時間ですが、私たち教師にとって考えを共有し合う場であるとともに学びの場だと思います。

私も11月14日に「一人一公開授業」を行いました。数学のn角形の内角の和がいろいろな式で表されることをグループで検証する授業を行いました。グループ活動に入る前に十分に個人で考える時間を持ちました。研究会ではそれがよかったのかどうかの話し合いになりました。グループのメンバーは、たくさん意見を出してくれました。また、生徒になったつもりで課題に取り組んでとても楽しかったという意見やつまづいたところの話もありました。これは、教科を解いているよさだと思います。これからの自分自身の授業を考えていく参考になりました。教師も生徒同士も授業と研究会を通して、互いに認め合う仲間づくりを行っていると感じています。

藤島通りから、本校に向かう道へ入ると、本校の屋上に大時計が見えます。大時計は30年間時を刻んできました。同じく諸先輩方や卒業生が30年間伝統を築いてきました。これからも大時計は時を刻んでいくでしょう。教師と生徒ともに新たな伝統を築いていかなくはなりません。教師も生徒もみんな協働し学び続けながら…。

勝山市立荒土小学校／玉村伸一

荒土小学校は、玄関を出ると目の前に白山を望むことができる風光明媚な場所である。春になると赤とんぼが飛び始め、近くの川にはバイカモが群生し、チョウゲンボウやセキレイが巣を作って子育てに励むなど自然豊かな環境の中にある。



平成25年度・平成26年度と県の算数コア・ティーチャー養成事業の指定を受け、「活用力をつける算数の授業」を研究してきた。そして、研究主題を「基礎・基本の定着と活用する力をつける指導の工夫～学び合う力の向上を目指して～」として研究に取り組んできた。その中で、子ども達につけさせたい活用力を①新しい課題に出会ったとき、既習内容に気づき活用して、解決する力、②学習した算数用語や式、図を活用して、友達に説明する力、③生活の中や他教科を学習する場面で活用する力と共通理解をして研究の実践をしてきた。具体的には、

(1) 基礎基本の定着のために、フラッシュ教材による復習や教材教具の工夫と利用、チャレンジ問題の準備に取り組んだ。フラッシュ教材を使って、授業の初めに短時間で既習内容を復習したことは、基礎基本の定着とともに、スムーズな授業の導入につながられ、児童の理解につながった。

(2) 活用力をつけることを意識した授業の工夫をした。授業の組み立てを原則として

つかむ→見通す→解決する→やってみる→ふり返る

の構成で取り組んだ。また、児童が、新しい課題に出会ったときに既習内容を使うように、既習内容の復習を単元前にしたり、前学年の教科書を用意しておき、課題を解決するときに利用したりした。次にスモールステップで学習内容を組み立て、子ども達が学習した内容を簡単な内容から少しずつレベルを上げていき、できるという自信を持たせながら新しい課題に挑戦できるように工夫した。

(3) 児童同士の学び合い場面を設定し、ペア学習やグループ学習に取り組んだ。学級では授業の中で、考えたことを児童に説明させたり、児童同士で話し合いをさせたりする活動を多く入れた。特に、高学年では、ホワイトボードを使って課題に対して班で考えを出し合い、その話し合いの結果を全体の場で紹介している。中学年や低学年では、ペア学習に取り組み、課題に対してペアで考えたり、全体に発表する前の練習をしたりしている。ペア学習を取り入れることで、発表に対する自信が付き、意欲も高まると感じている。また、課題に対して意見が出なくなったときにペアで考える時間を作ることで、新たな考えの展開が始まることがあった。

そして、研究授業を計画するとき、教師を児童役とした模擬授業で全教員が授業者とともに授業の内容を考えた。この模擬授業や授業研究会に、教職大学院の前園先生、小林先生、二宮先生、岸野先生、宮下先生に可能な限り参加していただいた。

このようにして私が担任している4年生の「一億をこえる数」の授業も研究して取り組んだ。毎回の授業で、フラッシュ教材を使って1億をこえる大きな数を一斉に音読したり、一人一人に言わせたりした。授業の中で、福井県の人口や勝山市の予算などの児童の身近な生活の中で使われている資料を教材としたり、紙を重ねた高さで大きな数を体験したりして教材も工夫した。また、オリジナル位取り板を作って、大きな数が読みやすい教具を子どもたちに作らせた。授業では、学習内容をスモールステップで計画し、分かったことを児童が前で説明したり、ペアで確認したりする時間を多く設定した。子どもたちは、自分の考えたことを友達に伝えることで自分の考えを整理したり、理解を深めたりすることができた。子どもたちは、楽しく授業に取り組めるとともに苦手としていた大きな数を通して整数の理解をすることができた。

このように研究を進めてきた結果、本校の授業は、子どもたちが課題についてペアやグループ、全体で話し合いながら考えたり、分かったことを確認したりする姿が見られる授業になった。また、教師も算数で学習したことを生活の中で活用できる力を子どもたちにつけさせるという視点で授業を工夫できるようになった。本校の全教員は、子どものために学ぶ意欲のある教員ばかりである。私自身も、この先生方とともに学び続け、一緒に成長していきたい。

福井大学教育地域科学部附属中学校／永廣裕子

3年次サブテーマが

「個の学びの推進力を高める、協働探究をデザインする」に決まりました！

福井大学教育地域科学部附属中学校では、一昨年度より第IX期研究主題を「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」とし、「主題－探究－表現」型の授業研究、「探究」と「コ

ミュニケーション」をキーワードとした協働探究学習の研究に取り組んでいます。1年次は「省察を捉え直し、次なる学びに生かす」、2年次は「協働の学びの場を問い直し、学びの繰り上がりを生み出す」がサブテーマでした。そして、ようやく3年次のサブテーマが「個の学びの推進力を高める、協働探究をデザインする」に決まりました。

このサブテーマが決まるまで、私たちは3ヶ月もの話し合いを重ねてきました。今回は、このサブテーマが決まる

までについて、簡単に紹介します。

そもそも、本校の研究体制は、研究の方向性をコーディネートする研究企画(週1回)、教科を越え4~5名で構成される4つの部会(週1回)、研究を全体で共有し協働で話し合う教育実践研究会(月2回)があり、これらを連携させながら、学校全体が同じ方向を向き、研究に取り組めるような組織となっています。

まず、6月の研究集会が終わると、一人一人が単元を通して実践してきたことを授業記録として残すために7~8枚程度の実践レポートを書きます。7月には、教職大学院の先生方6~7名に参加していただき夏季教育実践研究会を開催します。ここでは、小グループに分かれて各自の実践レポートを読み、語り合いながら、そこから見えてくる新しい視点を発見します。今回の研究会では、「本当に一人一人が発意を持ち、意欲を持続させながら主体的に学びに関わっているか」ということ、そして「そうでない部分もあるのではないか」という課題を共通理解しました。

これまで、協働探究でのクラス全体の学びの繰り上がりについて焦点を当て、授業研究に取り組んできました。しかし、一人一人に目を向けると、「話し合いのなかで自分の考えが発言できない子」、「学ぶ意欲が高まらない子」、「最初は興味を持つがそれが持続しない子」、「他の人に任せて結果だけ求めてしまう子」などの存在に気がきます。また、教師も、一人一人の学ぶ姿を十分見取れているわけではないことが挙げられました。

この研究会の後、自分たちの日頃の実践を振り返りながら、各部会で話し合いを重ね、それを持ち寄り、全体で実践研究会を行いました。

私も自分の取り組みを振り返ると、疑問や課題を解決したいという発意を抱いても、その後どうやってそれを解決するか検証方法を考えはじめると意欲が持続しない子がいることに気がきます。それはなぜなのかを話し合いながら探っていきます。研究会の後には再度、各自がレポートを書きます。このレポートは研究主任から印刷されたものが全員に渡され、次の実践研究会までに読み、思いを共有して次の部会や研究会に臨みます。この繰返しにより、他の

教科でどのような授業が行われているのか、また先生方が授業や子どもに対して日頃どのようなことを大切にしているのかにつながっていくのです。



サブテーマについては、ただ単に文言を決めるだけでなく、「今の子どもの実態」「日頃の授業を実践する中で見えてくる課題や挑戦したいこと」「言葉へのこだわり」など、お互いの思いを綴り、語り合いながら焦点化していきます。このような、協働体制の中で、3年次サブテーマ「個の学びの推進力を高める、協働探究をデザインする」が決まりました。

協働の学びの中で、一人一人の探究の見通しや主題を解明するための具体的な手立てを考え、子どもたちが実行する「構想」「構築」の過程をどのような学びにするとよいかについて着目していきます。さらにクラス全体及び一人一人の子どもが、協働の学びに主体的に参画し、学びが繰り上がるよう授業研究をします。まだまだ、分からないことはばかりですが、授業を実践していく中で私自身も学びながら、新たな授業デザインを常に考えていきたいです。

来年度の研究集会は、平成27年6月5日(金)を予定しています。また、今年度は、後期公開授業を12、1月に各全教科で行います。理科は、3年生の「エネルギー資源の利用」の単元で「放射線の性質」の授業を行う予定です。放射線を実際に観察したり測定したりしながら、目に見えない放射線の正体を明らかにしていきます。構想・構築の場を大切に科学的に探究しながら正しい知識を持って判断していく子どもたちを育てたいと考えています。お時間がありましたら、ぜひ御参観いただき、御指導いただけると幸いです。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校 坂下 元

今回は11月の週間カンファレンスでの学びについて紹介させていただこうと思う。私たちストレートマスターは毎週木曜日に福井大学に集まり、小グループに分かれて週間カンファレンスを行っている。ここでは午前中に行われる、一週間のインターンシップでの課題や悩みを意味づけする「今週の学びの振り返り」と主担当が企画した議題について語り合う「主担当企画」について紹介したい。

今月の「今週の学びの振り返り」では自分の専門の教科について深く考える機会となった。私は現在、インターンシップ先の学校で週に一回、特別支援学級で英語の授業を担当させていただいている。これまでの授業の中では、文法事項の定着よりは、「英語を楽しんでいる」と思ってもらえるような授業を大切にしながら授業を行ってきた。生徒は楽しそうに英語を使って活動をしてきたのだが、「楽しいだけでいいのか」という疑問を抱くよう

になってきた。授業を行っているクラスの生徒が将来英語を使った職業に就くことは考えづらい。それでも英語を学ぶ意義は何なのだろうか、という疑問をカンファレンスの中で話させていただいた。木村先生から「英語を学ぶことで見えやすくなる事象があるのではないか」というお話を聞かせていただいたが今の自分には答えることができなかった。しかし、同じグループの院生からの、「坂下くんが英語を勉強していて良かったと思うことはないの?」という質問から少し糸口が見えたような気がした。自分自身、職業に活かすために英語を学んできたわけではない。その中でも英語を学ぶ過程で見えてきたとは「外国語を学ぶことは母語を見つめ直すことになる」ということである。例えば、外国人に日本料理のレシピを伝える際に「煮る」という概念を説明しようとしたのだが、辞書を引いてもboil(茹でる)という単語

しか見当たらず歯がゆい思いをした。しかし、同時に、日本語の言葉の多様さ、日本語を創りあげてきた日本人の繊細さに気づくことになった。このことが公教育において全ての生徒が英語を学ぶ意義はという問の答えになるかは分からないが、このような英語を“通して”の学びを実現するにはこれまで大切にしてきた「生徒の伝えたいことを大切に英語の授業」を追求することが必要だと改めて感じた。このように教職大学院では自分の実践をゆっくりと語ることで実践を新たな視点で捉え直す機会がある。

一方、主催企画では「他校の研究から学ぶ」という11月の合同カンファレンスのテーマとリンクさせての語り合いの時間が設けられ、第三週には安居中学校の公開研究会に参加した。昨年度の11月の合同カンファレンス、「他校の研究から学ぶ」では何を話して良いかわからない状態であった。昨年度も他校の研究会に参加したり、他の学校の院生の授業を参観したりと、他校へ出かける機会があったものの、ただ「学校が落ち着いているな。」「レベルの高い実践をしているな。」というような感想を持つことしかできなかった。今回の主催企画では、公開研究会での実践をただ見るのではなく、その一時間の実践に至るまでの過程を推論することが、他校の実践を自分の実践に生かすことの手がかりになるのではないかと感じた。また、今後の研究会に参加する際に何を見るのかという視点が各グループで共有された。私

は、「今週の学びの振り返り」で抱いた「全ての生徒が英語を学ぶ意義」を探るために、英語が苦手な生徒の学びを迫ることに決めた。このような視点を持ち参加した安居中学校の研究会はこれまでとは違った学びを実感することができた。私は英語の授業を参観したのだが、英語が苦手なN君がグループのメンバーに支えられながら学校の良いところをなんとか英語で表現することができている様子を見るすることができた。授業全体を通じて、生徒が自分の言葉で自分の思いを表現しようとする積極的な姿勢に感銘を受けた、と同時に彼らの積極性の背景には何があるのだろうという思いを持った。公開授業の後に生徒による学校の取り組みの紹介がポスターセッションという形で行われた。そこでの生徒の原稿を読まずに自分の言葉で学校の取り組みを紹介する姿を見ることで、授業で抱いた疑問が解消されるような気がした。英語の授業だけではなく、生徒が自分の経験を自分の言葉で語る機会が安居中学校には何度も用意されている。安居中学校の先生方が目指す生徒像を共有しているからこそ、授業の場でも、特別活動のような場においても自分の言葉で伝えたいことを表現する生徒の姿が見られるのではないだろうかと感じた。

今月の週間カンファレンスでは問いが深まり、次の日からの自分の実践の活力が生まれたことを感じた。実践から問いを抽出し、再び実践に挑むという学び続ける姿勢を肌で感じた11月の合同カンファレンスであった。

教職専門性開発コース2年／坂井市立丸岡南中学校 山本 泰平

こんにちは、ストレートマスター2年の山本です。教職大学院のNews Letterを初めて手に取った方へ教職大学院の院生はいつもどんなことをしているかのお知らせも含めながら書いていく。私たちストレートマスターは日頃、拠点校と呼ばれる教職大学院と提携して下さっている各小中高で長期インターンシップを行っている。その中で授業実践をしたり、指導して下さる先生のクラスに関わらせてもらったり、学校の研究などに参加させていただいている。そのため大学での講義は週1回木曜日に行われるカンファレンス（通称、木曜カンファ）と月に1回現職として働きながら大学院生として勉強している先生とのカンファレンス（通称、合同カンファ）が基本である。さらに、その講義というものも大学の先生から講義を聞くものでもない。ここから少し、木曜カンファで何を学んでいるのかについてみていく。

まず、初めに日頃のインターンシップでの悩みなどを聞く時間がある。長期間学校の現場に関わらせていただく子どもに対していろいろなことを考える。短期間だと自分の授業のことでいっぱいだったものから、少し、目線が変わって子どもたちはどんな風に成長していくのだろうかとか、そのために自分が出来ることは何があるのだろうかなど人によって考える事は変わり様々な問題にぶつかる。その悩みを打ち明け、多くの院生や先生とともに自分の行動を振り返り、一緒に解決策を考えていく。悩みを報告し一緒に考えてくれることで気持ちがすっきりしてまた次からのインターンシップへの課題ややる気を養う。さらに一緒に考える方にも多くのメリットがある。例えば、私たちはまだ実際の現場で働いた経験がないため、現場でどのような問題が起こっているのかを知る機会はありません、ひとり一人が経験できる課題も限りがある。他の人の悩みを聞くことで実際に自分が現場に立った時に直面する問題を共有することができる。週に1度ではあるが一緒に頑張っているメンバー

だからこそ他人事ではなく自分がその立場だったらどうするのか、どんな考えをもった人がいるのかについて考えることができると思っている。また、小中高といろいろな校種に行っているのが自分が目指している校種とは違う人がどのような想いを持っていて子どもたちに接しているかについて考える事によって自分の目指している所になすべきことを考える機会にもなっている。

次に主催企画と呼ばれる、各学校に行っているインターン生がチームを作り今自分たちに必要なテーマを設けて話し合いを行っていく。12月は「学級経営」をテーマに話し合いが行われている。これを書いているときはまだ1週目しか終わっていないので、1週目にどんな話し合いが行われたかについて少し掘り下げていく。これまで経験したことや見てきた学級経営から自分が学級経営に大切だと思うことを話し合う。私たちの話し合いは小グループで行われていくので私が話したグループでは「熱い思いを持っている事」や「筋が通っている事」「子どもひとり一人をしっかり理解すること」などがあがった。先生からは子どもの信頼をつかむための小さなテクニックを聞くことができた。働いているとあたりまえのことでも、私たちには新しく、納得する話をお聞きすることができる。教員として働いていく上で避けては通れない学級経営について、ここからどのようにこのテーマが展開されていくのが楽しみになっている。ここで午前中は終わり。みんなでお昼ご飯を食べ終わりを高めている。

午後になると午前中とは視点が少し変わる。ざっくり言えば、これからの教育はどう進んでいくのかについて考えていく時間である。これがまた私たちを大きく悩ませていることは間違いないだろう。正直、初めは「こんなこと考えて意味あるの?」「現場に出て役に立つの?」と考えていた。それでも進めていくうちに自分の核になりそうなものを掴めるような気がしている。

M2では「公教育と教科」をテーマに「公教育とはなんぞや」「なんで各教科（私のチームは社会科）は勉強しなくちゃいけないの？」ということを考えている。私は学校が好き（行きたくないと思ったことはありますが）で社会科が好きで、勉強することについて子どもの頃は面倒くさいし遊びたいなど思っていたし、何で勉強しなければならないのかはよく分からないし、社会に出てからは役に立つとは思っておらず、社会に出るために必要なのかなと考えていた。（社会科の教員になるので私は今後役に立つことになりましたが…）ただ一方で、新しいことを知るのが楽しい気がしていたし、試行錯誤しながら問題が解けたときの嬉しさもあった。このテーマで考える事によって本当に社会科を通して学んでほしいことを考えるようになった。決して、用語を覚えるだけではない社会科、でもどうしても暗記科目であろうという固

定観念を打ち破れずにいたのもまた事実。学習指導要領にある平和で民主的な社会をつくる人を育てるための教育が社会科の目標である。このテーマについて考える事で、これから自分が授業を考えていく核になっていきそうである。もちろん、これは現時点での私の考えでこれからはもっといろんなことを学んで考えが変化していくことを楽しみにしている。

一日の最後は、各教科に分かれて授業について考える。他の人の授業と一緒に考えたり、自分の授業と一緒に考えてもらったり、いろんな指摘を受ける時間である。やはり、共に授業を考えることで一人では見えていないところを、考えることを逃げていたところを「ぐさっ」と横やりを入れてもらえ自分の授業が次のステップに進められるそんな時間になっている。

教職専門性開発コース1年／福井市中藤小学校 吉田 智保

『光陰矢の如し』、言葉通り月日が過ぎるのは早く、今年も師走に入った。インターンシップ先である中藤小学校では、公開研究会が開催され、一足先に師走の忙しさが感じられた。3学年では公開研究会に伴い、ことわざや故事成語を調べて報告文を作成する活動を行っていた。私も、学級の児童と肩を並べて調べ活動を行い、児童と同じ目線で新たな発見をすると共に、“書く活動”に際しての児童の成長を直に感じた瞬間であった。

またそれと同時に、私自身も一足早く師走に突入したかのような忙しさに追われていた。というのも、授業実践を行うことになったからである。私たちストレートマスターの院生は、後期に入ると、基本的に一単元の授業実践を行う。もちろん、前期も単発で授業をさせて頂く機会があった。しかし振り返ってみると、回数を重ねるにつれ、即興で授業を行うことに慣れた自分がいたが、それはあくまで自己満足のものであった。授業形態も静かにさせることにしか注意が向かず、指導内容を上から教え込む…いや、抑えつけると言った方がよいであろうか。そのような反省と、7月に東京で開催された合同カンファレンスで頂いた“抑圧しない、子どもの発言をもっと重視するような授業作り”の提案より、前期最後に道徳の授業を行ったが、圧倒的に足りない教材研究と実態に見合わない活動を行ったことにより、失敗に終わってしまった。不完全燃焼な私は、上記のことを踏まえ、夏の集中講座では今後の目標を『授業力向上』と題し、この悔しい気持ちの矛先を後期の授業実践に向けることにした。

そんな経緯もありながら、私が後期に公開することになったのは、算数の『かけ算の筆算』の単元である。この単元を行うに当たり、計算方法の基盤である考え方について、子どもたちと共に毎時の課題を乗り越えながら授業を作っていくと考えていた。また、多種多様な考えを持っている子どもたちの意見を引き出したかった。そのために、他社の教科書を比較し、この単元で本当に身に付けさせたい力は何かということ考えた上で、教材研究を重ねた。だが実際には、授業を構成するというこの工程に一番悩まされたのである。

“教える”というよりも、“興味を持たせて、一緒に考えていこう”とすると、教材研究も授業構成もここまで頭を抱えるものだとは思わなかった。しかし、そのように試行錯誤していく中で、算数の奥深さを初めて感じることもできた。

このようにして考えた授業を実践した感想を率直に述べると、『新しい発見の連続であった』その一言に尽きる。授業を行う中で、児童に目を向けていると、学習に

食いついている瞬間と、離れてしまった瞬間がはっきりと分かった。今回私が行った授業では、基本的に教科書は使用しない。児童には教科書がない分、多様な切り口の導入から毎時の学習課題を見つけさせたいと思っていた。この、学習課題に繋がる児童の自発的な疑問や壁が出てきた時、児童の目が学習に向いていたのである。

「授業に入る際に、まず解決すべき壁を作ることが重要。」と言っていた小林真由美先生の言葉を思い出した瞬間であった。また、この時、児童の疑問や意見をしっかりと拾い、的確に返すことで、児童の意識が学習に向いてくるのだと実感した。加えて、自分の考えを自分の言葉で紙に書くという活動も取り入れたのだが、授業後に見返すと発表こそしないが、私も思い浮かばなかった新しい考えをしている児童がいたり、児童に学ばされることばかりであった。さらに、児童を褒めてあげたいと感じた場面もたくさん見受けられた。1学期に比べて、言葉遣いや返事、話を聞く姿勢などがしっかりと出来ていることに、授業者として前に立って初めてその変化に気づき、その成長に心から嬉しいと感じた。

児童の意見を待つ姿勢を持つこと、参観者を意識しすぎて子どもに沿う・見取れなかった部分もあったということ…。反省点を挙げればきりが無いが、授業実践を終えた今、挑戦したいと思ったことを実践したという達成感に満ち溢れている。その背景には、土日や夜中にも関わらず、授業の相談に乗ってくれたり、共に考えてくれた院生の存在や、場を提供して下さったメンターの先生、悩みの渦中にいる時に背中を押して下さった小林先生、宮下先生を始めとする大学の先生方の存在があった。自分一人で作り上げた授業ではない、『協働』という言葉を身を持って実感した期間であった。また、拙い授業にも関わらず、一生懸命参加してくれた児童のためにも、今回の反省を生かして今後とも精進したいと改めて思った。

最後に、『光陰矢の如し』、文頭で述べたこの言葉には、月日が経つのはあっという間に二度と戻ってこないから、無為に送るべきではないという戒めも含まれている。今年も残りわずかである。冬の集中講座においてあっという間であったこの1年を振り返り、新たな学びを構築するためにも、インターンシップにおいて子どもたちと関われる日々を大切にしながら、実りのある毎日を送っていきたい。

◆ 他校の研究から学び、他校の研究を支える

November 合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井市豊小学校 栃川 正樹

11月の合同カンファレンスは予備日程に参加した。「他校の研究から学び、他校の研究を支える」のテーマは4月に発表されていた。しかし、その話題で語れるほど、これまで他校の授業研究会に参加できていない。そう思っていた私は、本日程に開催される県外の研究会に参加することを決めた。それから、間もないある日、1通のメールが届いた。当日の朝のオリエンテーションで「他校の研究から学ぶことの意味」について話題提供をしてほしいという依頼であった。正直、みなさんにお話しできるほどの話題もなく、自信もなかったが、自分がこれまで考えていたことを省察できることや自分に声をかけてくださったことを意気に感じ、お受けすることにした。

その日から、話の内容を考え始めた。素直な気持ちを参加者につけようとスライドにまとめること25枚。スライドを作成する過程で、どんどん自分の考えがまとまっていくことが自覚される。後になって、この3年間だけでも8回もスライドを作って発表をしていたことが分かったが、プレゼンスライド作りが嫌いではない自分にも気づけた。



話の内容は「授業参観の視点について、教職大学院に入学する前後でどう変容したか」「授業研究会をどう支えるか」「他県の授業研究会の様子」などであった。スライド作成にあたっては、木村先生と藤井先生にお忙しい中、親身になってお話を聞いていただき、アドバイスいただいたことに感謝するとともに心強く嬉しく感じた。

そして当日。エピソードをもとに精一杯話したつもりだが、私の力不足で最後はまとまりのない話になって

しまった。しかし、ファシリテーターの先生からは、「無理にまとめてしまったら、その段階で先生の成長を止めることになってしまう。」と説得力ある言葉をいただいた。また、昼食時には、「聞いていて共感できた。」とか「分かりやすかった。」「みんながもやもやしている部分を語ってくれた。」と賞賛していただき、本当に嬉しくがんばってよかったと充実感に満たされた。

カンファレンスでは、午前中に「他校の研究から学んだこと」として、グループのメンバーとそれぞれ他校に行っただけのことを語り合った。その中で、指導案や授業研究会の存在意義について話が持ち上がり、なぜそれらが必要なのかを考えさせられた。これまで、考えてみたこともなく、存在していることが当たり前と思って教員人生を送ってきた私がいることに気づけた。もし、それらがなかったらと逆算的に考える方法も他の物事を思考する時に応用でき参考になった。他にも、他校の公開授業の学びから「話す」と「語る」ことの違いについて話が及んだ。話の中で、授業でもっと教師も児童も語る場面を多くしていく必要性を感じた。また、他校の研究会に複数の先生が参加することで、共有ビジョンが生まれ、自校の研究を進めて行く上で、変革しやすいのではないだろうかという話も興味深かった。

午後は、「自分自身の実践の挑戦を語る」というテーマでグループセッションをした。グループの先生からは、連想法による道徳授業評価の実践を見せてもらった。実践することで見えてくることも多々あることも学べた。連想法の存在は、以前に教えてもらっていたが、実践に移していない自分を反省した。

私にとって、最後の合同カンファレンスは、とても充実した時間となった。そして、12月末からは冬期集中講座が始まる。いよいよ長期実践報告作成で総まとめすることになる。これまでの合同カンファレンスでは、本当にたくさんの先生方との出会いがあり、様々なことを学ばせていただいた。そこで得たことを省察しながら、長期実践報告作りにも、がんばっていききたいと思う。

教職専門性開発コース2年／啓新高等学校 船木 知憲

11月15日に行われました合同カンファレンスについて紹介いたします。今回の合同カンファレンスは今年度最後の会でした。長いようでとても短い2年の教職大学院生活です。この原稿が公に出る頃には冬季の集中講座にて教職大学院最大の行事である長期実践報告書の本格的な執筆に差し掛かっているだろうと思われます。

さて、今回の内容ですが、他校の研究から学び、他校の研究を支えるというテーマのもとにスタートしました。オリエンテーションは竹野先生（藤島中学校）が『他校の研究から学ぶことの意味』という題材でお話をされました。竹野先生が所属されている福井市における中学校の数学研究の組織での取り組みから学んできたことが中心となり、その中で協働研究をするということはもちろんのことだが、教科の専門性を磨く研究会の存在ももっと必要ではないかという提案がなされました。私のような教科の専門知識がまだまだ足りない立場にとっては大変重みのある提案でした。幅広い視点で様々なことを考えていきたいものです。

本題の話合いでは、他校と自身の学校の取り組みの

違いという観点が出てきました。例えば、附属中学校と丸岡南中学校の学校文化の違い、職業科高校と普通科高校の特色の違い。それぞれの良さや改善点など様々な話が飛び交いました。その中で、話はどんどんと派生していき、それぞれの特色を生かしてどのような人材を育てているのかというところまでも発展していきました。話し合いのテーマの枠にはまりきらず、その上に発展していくことは時に大切なことだと思います。

午後の時間は、自分自身の実践の挑戦を語るという題材です。いつもならば、同教科の先生同士が語り合う場ですが、今回は最終回ということで特別に、教科の枠組みを解いた他校種・他教科の授業の先生方とのクロスセッションでした。校種や教科が違えば、話す内容や伝え方が変わります。教科の専門的な話というよりはどちらかといえば、子どもにどのような力をつけていきたいかという視点が強くなりました。私が啓新高校での授業実践の取り組みを話すと、先生方がそれぞれの学校での様々な取り組みを話して下さり、1つの学校単位で子どもを見ることに留まらず「広く見る視点」や、子どもの成長を

小学校から社会に出るまで「長く見る視点」が得られました。このように「それまでは当たり前と考えていたことを、新しい視点の獲得によって当たり前ではないと認識し、新たに再構成するプロセス」が得られるのは教職大学院の醍醐味です。学生として腰を据えてじっくりとこのような学びができるのも残り僅かであることを考えると寂しく思いますし、現場ではここまで自由に他校から学ぶことはできないでしょう

から今がいに貴重であるかと思う日々です。

11月も中盤に差し掛かり外ではすっかり冷え込んできている中ではありましたが、コラボレーションホール内では今年度最大の熱い時間が過ごせたと心から思います。この気持ちを忘れずに一層日々の教師修行に励んでいきます。

スクールリーダー養成コース1年／板橋区立中台中学校 星野 聡徳

こんにちは、スクールリーダー養成コースM1の星野聡徳です。中台中学校は福井大学教職大学院の拠点校であり、今回の11月合同カンファレンスの会場になりました。来校された教職大学院の先生方、院生の方々、関係者の方々ありがとうございました。本校は東京都の板橋区にあり、同じく板橋区の赤塚第二中学校に続き平成28年度から教科センター方式になります。現在、校庭に建てたプレハブ校舎で生活しています。最近、旧校舎がついに解体され、瓦礫が毎日運ばれています。

当日は玉川大学の石井恭子先生も参加してください、理科教員の私としてはとても充実した一日になりました。石井先生はさっそく、最寄駅から本校までの道のりの間で金属加工場に寄り、アルミニウムの破片を拾っていました（工場の許可はもらっています）。アルミニウムを嬉しそうに持つ石井先生を見て、本当に理科が好きなのだなと感じました。理科の出発点は自然に対する興味と観察です。どんなささいな事物や現象でも、教材に成り得ます。私も授業では、生徒ができるだけ自然に触れて体験できるようにしています。

さて、合同カンファレンスでは多くの先生方のお話を聞くことができ、充実したものとなりました。その中で、高校にインターンで勤務している院生さんのお話を聞いて学んだことを綴りたいと思います。その先生は、「コミュニケーション英語」の授業で、どうテーマや流れをつくっていいか悩んでいました。ALTの先生に箸の使い方や日本のテーブルマナーなど教えるのがテーマです。その際、(1) ALTの先生を生かすこと、(2) 英語を

できるだけ使うこと、など目的がありました。同じテーブルの先生達でいろいろ案を出しました。そこで気付いたのは、教科にまたがり共通することがあること。例えば“学ぶ必然性”が重要ということです。“今日は〇〇しましょう”といわゆる“めあて”を書いて授業を始めるだけでは、生徒の学びたい意欲は喚起できません。その後の発言や話し合いも盛り上がりません。盛り上がるためには、生徒が主体的に活動するためには、“〇〇を知りたい! 〇〇をやりたい!”という意欲が必要です。英語ならば、“ALTの先生に〇〇を教えてあげたい”という気持ちが活動する意欲になると思います。また、授業を英語で進めていきたいのですから、“絶対に英語を使わなければいけない”というルールも必要なのかもしれません。言いたいことを一度日本語でまとめて、それから英語にして発言したのでは、文法の授業と変わりません。生徒が英語でALTの先生にリアルタイムで指示を出して授業を進めていくような活動が必要でしょう。

理科はよく教材に恵まれている、と言われます。事物や現象が学ぶ対象ですから、それらを見れば興味を喚起するのは難しくありません。その分、授業の腕が問われます。理科の面白さに頼りすぎて、“学ぶ必然性”を作り出せないと、理科といえど授業はつまらなくなるかもしれません。初心に帰り、授業のデザインをしっかりと考えていきたいと思います。

書評

授業研究と授業の創造

的場正美・柴田好章 編／溪水社



「授業研究は東京師範学校の実地授業の批評として明治時代に始まった日本の学校文化に深く根ざした教師による教師の研究である」(p7)。そのような日本の授業研究が世界的な注目を浴びて久しいが、その一端を支えてきたものに授業分析がある。授業分析を創始したのは元名古屋大学教授である重松鷹泰であり、日本独自の研究だとされている。重松による授業分析は逐語記録等の客観的な記録を通して教師及び子どもの思考・活動や展開を関連的に追究するものである。重松の科学観に基づき、名古屋大学、九州大学を中心として授業分析に関する研究は進められている。本書はそのうち名古屋大学の研究グループが中心となり、授業研究と教師の成長、授業の創造についてまとめられたものである。授業分析は授業研究においてどのような布置になるのだろうか。的場正美(元名古屋大学教授)は授業分析を授業研究の一手法として位置づけ、本著の中で以下のように定義して

いる。授業分析とは「詳細な逐語記録を基礎に、授業の諸要因の関連、子どもの思考、教師の意志決定を解釈学的・経験科学的に解明する研究」である。本書は目次からもわかるように、重松以降の授業分析理論と授業研究を通して、授業分析の理論的構築、可視化手法、国際的比較研究、歴史的変遷といった理論的な記述に加え、校内授業研究を通じた教師の学びや協同的な学びの創造、複式学級における取り組み等、実践を基盤とした記述もされている。現代の授業研究がどのような展開と特徴と持ち、それらがどのような理論に支えられているのかを示してくれる。子どもの実態に寄り添った事実具体的な授業研究が取り組まれる昨今において理論的な視点を提供してくれる一冊であると言える。(藤井佑介)

【目次】

はじめに

第1部 教育学の基礎理論の構築のための授業の研究

- 第1章 授業分析の方法と課題
- 第2章 授業分析による理論構築と授業過程の可視化手法
- 第3章 比較授業分析による
ティーチング・スクリプトの解明
- 第4章 授業を通しての子どもの思考の究明

第2部 授業の研究と教師の成長

- 第5章 校内授業研究を通じた教師の学び
- 第6章 授業分析の原理に基づく参加型授業研究界
- 第7章 教員養成における授業研究
- 第8章 教員免許状更新講習における
授業記録検討会による教師の気づき
- 第9章 授業研究による学校カリキュラムの編成と改訂
- 第10章 韓国における授業研究の展開

第3部 豊かな授業の創造

- 第11章 協同的な学びの創造
- 第12章 書くことの教育の充実
- 第13章 小学校算数「長さの学習」における
概念的な理解と操作活動
- 第14章 高等学校における
総合的社会科にもとづく授業開発研究
- 第15章 構成的音楽表現活動による音楽教育の創造

第4部 教育実践の歴史から学ぶ

- 第16章 授業研究の起源と歴史
- 第17章 日本における複式学級における授業研究
- 第18章 愛知県における戦後新教育実践の展開
- 第19章 生活綴方教師の教育観と宗教

おわりに

地面のかさぶた

ゴミが物語る総合学習の実践

堀 徹造 / 川島書店 2003年



本書は、カリタス小学校で行われた小学校3・4年生での総合学習の実践である。子どもたちが、実社会の問題について、自ら身体でその本質を理解し、どうしたらいいのか他者と協同して考え、解決に向かっていく長い道のりが、子どもの姿を綴った丁寧な記述を通して表現されている。そこには子どもたちがそれぞれの認識を発展させ、生き方や自己をも作っていく姿が垣間見える。総合学習の中で子どもがいかに学ぶのかを考える上でぜひ読んでおきたい書である。実践の展開の片鱗を少しだけ紹介したい。

出会い 学校は神奈川県川崎市の多摩川沿いに位置し、多くの子どもが電車通学するため、低学年のうちは学校のある中野島の町への愛着は低いという。しかし3年生になり、社会科で中野島にスポットが当てられてから関心が高まっていく。「学校一あたかき学級をつくらう」という思いのもと、校区探検で多摩川に出かけた子どもたちは、その途中、強烈なインパクトを持って町の汚れに出会う。「中野島スッカリ大作戦」が始まった。

地面との対話 まずは、川の源流に近い御岳溪谷へ出かけた体験から、川沿いに住む人々に向けてポスターを作成し、駅での掲示を目指していく。その過程で、駅の清掃を誘われ、中野島駅で清掃体験をする。意気揚々と出かけた子どもたちだったが、こびりついたガムを一つ削るのに半時間を要す状況で、一筋縄ではいかない。清掃を重ねる中で子どもたちは「かなしそうなゴミさん」「泣いていた地面が笑った」と地面と対話していく。

地面の声を届ける ポスターの作成と、駅や河川敷での清掃活動を継続していく中、社会科での区役所に関する学習をきっかけに、ポスターを区役所のエントランスに貼ってもらおうと考えた子どもたち。はじめは、前例がないので貼れないと言われてしまうが、やがて区長から、町づくりについて話し合おうという呼びかけがあり、7人の代表者が面会を果たす。地面やゴミの声を伝え、町づくりの提案を伝えていく。

ゴミを介した多様な対話

学習発表会の展示を通して校内で感想を得たり、区長から町づくり案への返答を得て町内会の掲示板にポスターを貼ってもらったり、様々な人との対話を通して、一定の手応えを得て3年生が終わる。

「スッカリ大作戦」の再開 4年生になっても通学路の手製ゴミ箱のゴミ回収を継続している子どもたち。「スッカリ大作戦」が再開する。

出会いを支えに深まる地面への思い 特別養護老人ホームへ清掃と歌の合唱に出かけ、共感的な反応を得て涙を流す子どもたち。駅の清掃では、地面が「痛い」から、削るのでなくかさぶたを剥がすようにガムを取っていく。通学路に設置していた手製ゴミ箱のゴミを毎朝回収してくれていた人にも出会うことができる。

呼びかけの質を高める 子どもたちは共に町づくりをする呼びかけとして、地元の見聞板、川崎市への予算案提出、事前交渉を経たポスター作成、手書き壁新聞の駅への掲示などを行っていく。さらにリサイクルショップを構想し、様々な工夫してフリーマーケットを出店し、売り上げについても有効な使い道を検討して実行していく。

本書のタイトル「地面のかさぶた」とは何のことなのか、読むまでは全く分らなかった。それは、地面との対話を繰り返す中で子どもに湧き起こってきた、ゴミや地面を思う気持ちが凝縮された言葉であった。ゴミや地面を見つめる過程で、子どもたちは世界を自分の目で捉え直し、社会の様々な人に出会い、現実の厳しさと温かさに触れ、まさに「市民」として共に社会を支えることに挑戦していた。その背景には、協働探究者として、子どもの声を丁寧に聞き取りながら、活動を跡づけ、子どもや活動に関わる人々をつないでいった教師の姿がある。教師として子どもの姿をどのように捉え、活動を共に紡いでいくかという点でも学ぶことの多い書といえる。(岸野麻衣)

2/27 Fri. 17:00-19:00

Pre-session ESDがSDになるには？ -ESDのメインストリーム化に向けて-

2/28 Sat. 10:30-17:40

Session 0 シンポジウム 10:30-12:00 「知識社会の教師の資本」

〈シンポジスト〉	アンディ・ハーブリーブス (ボストン・カレッジ 教授) 佐藤 学 (学習院大学 教授) 秋田 喜代美 (東京大学大学院 教授)
〈コーディネーター〉	木村 優 (福井大学教職大学院 准教授)

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ/子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

これまでZone Aでは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとしてセッションを積み重ねてきました。子どもたちの豊かな学びを支えるために、協働する組織づくり、学校全体のコミュニティの活性化をいかに進めるのか。今年度6月は、その一つの糸口である“教師のやりがい”をキーワードとして「教師のやりがいが生まれる学校」をサブテーマに設定し、議論を重ねてきました。そして、これまでのラウンドテーブルの学びを経て、その鍵は「子どもの姿」や「授業」の中にあり、子どもたちの本当の豊かな学びにつながるビジョンを共有することが教員組織には求められているのではないかと、一つの結論を得ることができました。立場や世代、考え方の違い、それらを超えてみんなが一つの課題に向かっていくにはどうしたらいいのか。現実的で具体的な共有ビジョンとはどういうものなのか。それらを考えるためには子どものこと、学校のことを語り合える組織づくりを検討することが必要だと考えました。よって、今回は改めて「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」について、学校改革・授業改革の実践事例を手がかりに、再考していきます。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、子どものこと、授業のことを語り合える組織につながる学校づくりの実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20

教師のやりがいが生まれる学校

〈シンポジスト〉	長野県中野市立中野小学校 福井市森田中学校 予定 金沢大学附属高等学校 予定
〈コメンテーター〉	秋田喜代美 (東京大学・教授) 予定
〈コーディネーター〉	岸野麻衣 (福井大学教職大学院・准教授) 予定

子どものこと、授業のことを語り合える組織づくりについて、各学校種の立場から、そのプロセスを語っていただきます。さらにコメンテーターを通して、参加の皆さんとともに、実践の意義について考えていきます。

Session III フォーラム 15:30-17:40

先の2つのsessionを受け、参加者が小グループに分かれ、それぞれの立場や背景を基盤として議論し、共有していきます。それぞれの参加者が「語り合える組織」について日々、感じていることや悩んでいることについて、本音を交えてじっくりと語れる場にしたいと考えております。

Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする ～学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方～

中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について」（2012. 8. 28）と、それに続く、教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議報告「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」（2013. 10. 15）、さらに初等中等教育分科会等の議論において、21世紀の知識社会・グローバル社会・少子高齢社会の課題解決を見据えた教育改革として教員養成・教員採用・教員研修の三位一体の改革が目指されている。具体的には、教職大学院の拡大・拡充と修士課程の教職大学院への段階的移行、教員免許制度改革、悉皆研修改革等が謳われており、各改革を推進するためには「**教育委員会、大学等の関係機関がそれぞれ責任を果たしながら、その連携・協働により、教員の養成、継続的な学習に対する支援を行うことが重要**」であることが繰り返し示されている。

なぜ教育委員会と大学の連携が必要なのか。それは、グローバル化する知識社会に生きる子どもたちに「生きる力」を培うことは、国の在り方をも左右する喫緊の課題だからである。つまり、これからの教員養成系学部は、採用までの4年間のみをターゲットにするのではなく、教育委員会の行う教員研修と連携・協働することで、教師の生涯にわたる職能成長を支える教師教育機関に転換しなければならない。教職大学院と教育委員会の連携・協働の在り方が、日本の教師教育の方向性を決定し、さらには、子どもたちの学力形成をも決定づけてしまうことになるだろう。

このような教師教育改革をめぐる現在の動向に鑑み、今回のZone Bでは「21世紀の教師教育をイノベーションする」と題し、今後の教員養成と教員研修のイノベーションを成し遂げる方策、さらに教育委員会と大学・大学院との連携にかかわる具体的な課題を明らかにしていく。特に、日本の教師教育のあり方に課題が山積する現在、教育委員会と大学・大学院がいかなる教員養成を展望し、いかにして教員研修を充実させていくのかに議論の焦点を絞り、広く参会者の皆様方と共に以下のセッションを進める。

なお今回は、全国の教員研修センターと教職大学院設置予定大学等に参加を呼び掛けている。教員研修との連携・協働の姿勢が教職大学院設置には必要条件であり、また、「新しい学力」を培う上での教師の学習観の転換を図ることが教員研修の緊急課題であり、さらに、教育委員会と教職大学院の連携・協働がこれからの日本の教育の礎となるからである。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50 （会場：1階ロビー）

教員養成・教員研修に関する教育委員会と大学・大学院の実践をポスター報告いただき、参会者の皆様方と共に実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20

学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方

- 〈シンポジスト〉 鈴木 寛（文部科学省・参与／福井大学教職大学院・客員教授）
林 雅則（福井県教育委員会・教育長）
伊藤 学司（長野県教育委員会・教育長）
- 〈コメンテーター〉 佐藤 学（学習院大学・教授）
- 〈司会〉 松木 健一（福井大学教職大学院・教授）

Session III フォーラム 15:30-17:30

21世紀の教師教育をイノベーションする

（1）都道府県教育センター、（2）福井県教育研究所、福井県特別支援教育センター、福井県嶺南教育事務所、（3）大学・大学院 の3者からそれぞれの取組と実践を小グループ内で話題提供いただき、参会者の皆様方と共に議論を進めます。

※話題提供機関：岐阜大学教職大学院／東京学芸大学教職大学院／和歌山大学／大阪教育大学／宇都宮大学など
福井県教育研究所／福井県特別支援教育センター／福井県嶺南教育事務所 鹿兒島県教育センター／
京都府教育センターなど

（12/12時点での確定分のみ記載）

Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培うー持続可能なコミュニティをコーディネートするー

これまでZone Cでは、各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を、地域・世代・領域を超え共有し検討し続けています。そして、ここ数年は、コミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。現在、私たちが地域や職場で出会う課題は、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決しえない、より複雑で高度なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習においても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。

Zone Cは、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。Session I のポスターセッションでは、AOSSAのフロアをまたぐ空間的な広がりの中にポスターを配置し、それを通じて互いの実践を交流します。Session II のシンポジウムは、「持続可能なコミュニティをコーディネートするー女性の声を聴く>実践の可能性ー」と題し、コミュニティの持続的な発展と専門的力量形成を支える「語り・聴く」ことの意義を考えていきます。前回および前々回では、広報と記録の持つ力として個々の実践をつなぎ編んでいくことが確認されました。今回は、前回までの議論を踏まえ、「語り・聴く」関係性の中で活動が編まれ、実践がつながり、コミュニティがひらかれていく可能性に注目します。Session III のフォーラムでは、シンポジウムでの問題提起を受けながら6人程度の小グループを組み、互いの活動を交流・共有していくクロスセッションを行います。

多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Session 0 オリエンテーション 12:40-12:50 AOSSA 6階（参加受付ブースあり）

Session I ポスターセッション 12:50-13:50 AOSSA 4階 アトリウム・5階展示スペース

「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」
福井市・越前市・池田町・勝山市他の公民館・福井大学探求ネットワーク・福井市教育委員会生涯学習室・福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」他

Session II 趣旨説明・シンポジウム 14:00-15:20 AOSSA 6階 レクリエーションルーム

持続可能なコミュニティをコーディネートする ー女性の声を聴く>実践の可能性ー

〈シンポジスト〉 遠藤 恵（NPO法人市民メディア・イコール副理事長）
「『ふくしま、わたしたちの3.11～30人のHer Story』証言記録集について」（仮）
久島 幸江（越前市味真野公民館）
「地区女性会の状態調査の実践から見えてきたこと」（仮）

〈司会〉 羽田野 慶子（福井大学）他

Session III フォーラム 15:30-17:40 AOSSA 6階

小グループでの実践交流

＊2月28日、Zone Cの会場はJR福井駅東口のAOSSAになります。また、2日目の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。



Zone D 授業

授業改革の扉を開く ～教師は授業sで何を残したいのか？～

「授業S」それは一回限りの授業ではなく、日々の積み重ねとしての授業を意味します。子どもたちが学校生活において、最も多くの時間を過ごす授業。その膨大な時間の営みの末に、あなたは、私は、私たちは何を残したいと願うのでしょうか。

そして私たちは「花は咲く」の歌詞のごとく振り返ります。「私は何を残したのだろうか」と。

A・アインシュタインは言います。「教育とは、学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう」と。

2015年春のZone Dでは、私たちが実践する授業Sの後に子どもの中に残り、生き続けるものを互いに語り合い聴き合って、これからの授業Sのあり方をめぐる深い余韻と、授業改革の扉を開く意欲を残したいと願います。

Session 0 ガイダンス 12:40-12:50 総合棟 1 3階大会議室

Session I ポスターセッション 12:50-13:50 総合棟 1 3階大会議室またはロビー

横浜山手中華学校／牛久市立下根中学校／勝山市立鹿谷小学校／お茶の水大学附属小学校

Session II シンポジウム 14:00-15:20 総合棟 1 3階大会議室

問題提起、方向性を探る「教師は授業sで何を残したいのか？」

〈実践報告〉 古屋 和久（山梨県見延町立大河内小学校）

〈コーディネーター〉 小林 和雄（福井大学教職大学院）

Session III フォーラム 15:30-17:40 総合棟 1 3階大会議室

〈実践報告〉 深見 宏（埼玉県立新座高校）

〈コーディネーター〉 富永 良史（福井大学教職大学院）

小グループで語り合い、聴き合う

3/1

Sun. 8:30-14:00

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。



参加申し込みの方法は、福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。
あわせて、3月1日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。ご希望される方は入力フォームからお申込み下さい。

◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆

平成26年度 自主研究発表会

坂井市立丸岡南中学校（平成26年11月）

先月の11月14日（金）に平成26年度の自主研究発表会が丸岡南中学校で開催された。3年間のサイクルで研究実践を行い、その3年間のまとめとして研究紀要を発行してきた学校であるが、今年度がそのまとめの3年目である関係で、研究主題「学び合う学校文化の創造」を掲げた研究紀要『平成26年度 自主研究発表会』（全135頁）が発行された。高島健一校長の「はじめに」にも書かれているように、県下初の教科センター方式の中学校として平成18年4月に開校した学校は今年9年目を迎えている。来年は10周年となる年度である。「教科センター方式」と「縦割異学年（スクエア）制」を両輪として、学習指導・生活指導の両面から生徒の自主性・自律性をはぐくむという新しい教育理念に基づいた学校である。平成20年度に福井大学教職大学院が設置されて以降、拠点校の一つとして院生のインターンシップを受け入れていただいている。校舎が新しく、かつゆったりとオープンなつくりで、生徒たちはのびのびと学校生活を送っている。インターン生たちも週3回学校に通い、授業を初め学級会・生徒指導・部活など、あらゆる面で多くを学ばせていただいている。

平成24年度から学び合うことができる学校を目指して「学び合う学校文化の創造」という新たな主題を設定し、「グループによる少人数での学び合い」「教職員どうしの学び合い」を柱として、これまでの研究を更に発展させてきている。生徒の視点に立ったメディアセンターのあり方についても教員が協働して研究してきてい

る。研究のシステムとしては、①開校以来毎年開催してきている自主研究発表会、②毎月教職大学院の教員が参加する「研究の日」、③教職員が教科を超えて小グループに分かれて行う公開授業と事後の協議会など、教職大学院の担当教員と協働して学校づくりに取り組んできて

いる。先日の11月22日の公開研究集会も多くの方々に参加によって成功裏に終了した。私の担当した社会科の授業も、生徒たちの自主的・自発的な取組みが顕著に現れた授業であった。その授業の準備のために授業者の先生はもちろんであるが、教科を超えて同じグループの先生方が熱く語り、授業者へのサポートをされていたことが深く心に残っている。先生方の協働の姿がこの学校の実践研究を支えていると実感した次第である。その基盤に校長・教頭が管理職として土台を築いていることも重要なことである。今後、ますますの発展を期待したい。

（森 透）



Schedule

12/24 wed - 12/26 fri 集中講座

1/4 sun - 7 wed 長期実践研究報告作成

1/17 sat 長期実践研究報告作成（予備日程）

【編集後記】

年の瀬を控え、窓から見える景色もすっかり冬です。各校の公開研・研究集会や各地でのラウンドテーブルを通じて、活発な実践交流に取り組んだ秋の学び。その経験の意味は、冬の集中講座や長期実践研究報告書の執筆の中でふりかえられ、捉え直されていきます。今年も院生の皆さんとともに、自分自身の歩みをじっくりふりかえる「熱い冬」を過ごしたいと思います。（杉山晋平）

教職大学院Newsletter No.68

2014.12.24発行

2014.12.24印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp